パンと魚［四幕・喜劇］

サマセット・モーム　作
（田原　創　訳）

登場人物

聖堂参事会会員セアドア・スプラット牧師閣下
（サウスケンジントン、聖グレゴリー教会の教区牧師、五十男）

スプラット伯爵（セアドア・スプラットの兄、背が高くでっぷりした賢い五十男）

ライオネル・スプラット師（セアドア・スプラットの息子、副牧師）

ロックスハム卿（紳士らしい風貌をしているが平凡な青年）

バートラム・レーレング（女性を惹きつける男性美の典型のような男、二十五歳）

ポンソンビー（スプラット家の執事）

フィッツジェラルド夫人（背の高い美人、自信家でユーモアに満ちている）

ソフィア・スプラット夫人（セオドア・スプラットの妹、美しい五十女）

ウィニフレッド・スプラット（セオドア・スプラットのかわいい娘、二十一歳）

グウェンドリン・デュラント（二十二、三歳の娘）

レーリング夫人（バートラム・レーレングの母）

ルイーズ・レーリング（バートラム・レーレングの妹）

場は一貫して聖グレゴリー牧師館の客間である。

第一幕

聖グレゴリー牧師館の客間。広くてよくできている。家具は今の流行を追っている。豪華で上品で金がかかっている。イギリス大法官であった初代スプラット伯爵の全身像が目立つところに置かれている。客間は背後にあるもう一つの部屋に通じており、アーチのついたに通路よって隔てられている。上手と下手にドアがある。

ソフィア夫人がソファーに横になって『フォートナイトリー・レビュー』を読んでいる。断固とした様子で身なりのきちんとした美しい女である。軽い皮肉を貯えており、時として自分が皮肉であることに喜びを感じている。五十歳である。

茶器がテーブルの上に並んでいる。ポンソンビーがティーポットとケトルを持って入って来る。ポンソンビーはこれ以上ないくらい印象的な風貌の執事である。国会議員の自負心を無言の陰気な重々しさに結び付けて、非常に金にかかる葬式にしてしまうほどである。

ソフィア夫人は雑誌を読み続け、ポンソンビーは義務を果たして引き下がる。すぐにライオネルが入って来る。聖堂参事会会員スプラットの息子で副牧師、ソフィア夫人の甥である。パッとしない金髪の背の高い青年である。聖職者らしく、見苦しくない程度の服装しかしていない。

ライオネルはソフィア夫人を見てからティーケトルを見る。

ライオネル　お茶の用意はできましたか、ソフィア叔母さん？

ソフィア夫人　［雑誌を下に置きながら］疑わしいわね、ライオネル。

次のセリフの間にソフィア夫人はお茶を入れる。

ライオネル　何てたくさんカップがあるんだ。客が大勢来るんですか？

ソフィア夫人　わたしじゃないわ。多分、ポンソンビーよ。

ライオネル　ポンソンビーがここに来る人たちを招待しているのかどうか、分からないことがあります。普通なら、その人たちが呼ばれているのを知っているのは彼だけですけど。

ソフィア夫人　もしそうなら、彼の交際範囲は随分と種々雑多な人たちから成り立っているとしか言いようがないわ。

ライオネル　父は家にいますか？

ソフィア夫人　いないと思うわ。多分、侯爵未亡人のティーテーブルでシンプルライフに

ついて話し合っているんでしょう。

ライオネル　ああ、お茶にありつけてよかった。

ソフィア夫人　今日は忙しかったの？

ライオネル　いいえ、それほどでも。

ソフィア夫人　あなたは出来高払いじゃなくて時間給だということを喜ばなければいけないわ。

ライオネル　でも、父は給料を上げてくれるべきだと思います。あの金額じゃ、ほかの人間は雇えないでしょう。

ソフィア夫人　あなたのお父さんは主義として副牧師にはずっと十分な給料を払わないできたわ。その方が誘惑にさらさないでおけると思っているのよ。

ライオネル　天に宝を貯えても仕立屋の勘定を払う助けにはならないことを父は分かっていないみたいです。

ソフィア夫人　でも、あなたが着る物に事欠いているようには思えないわ。

ライオネル　そうです。だから、仕立屋につけがあるんです。

聖堂参事会会員のスプラットが入って来る。見事に縮れた白髪の頭をした背の高いハンサムな男である。きれいにひげを剃ってあって威厳があり、非常に人当たりがよい。自分がハンサムで成功者であることを知っている。服が見事に合っている。

スプラット師　お茶の用意はできたかね？

ソフィア夫人　光栄にもわたしたちが同席してもいいのかしら、セオドア？

スプラット師　［ほほえみながら］お前たちに異存がなければね。フィッツジェラルド夫人は着いたかな？

ソフィア夫人　フィッツジェラルド夫人ですって？

スプラット師　今日来るのを忘れたのかね？

ソフィア夫人　あらまあ……。呼び鈴を鳴らして、ライオネル、お願い。

スプラット師　［ちょっと荒々しく］全く、ソフィアときたら。

ライオネル　［呼び鈴を押しながら］彼女は泊まるんですか？

スプラット師　彼女は家の修理をさせているんだが、まだ完全には済んでいない。それで、住めるようになるまでここに泊まるようにと、ソフィアが親切に誘ったんだ。

ソフィア夫人　思い出させてくれてよかったわ、セオドア。

スプラット師　お前に思い出させるのには慣れっこだよ、ソフィア。

ソフィア夫人　あなたはそれだけ女性に対して慇懃にする十字架を背負っているのよ、セオドア。あなたからそれを奪うのは残念だわ。［ポンソンビー登場。］ポンソンビー、今日、フィッツジェラルド夫人が来る予定なの。部屋の用意ができているか見てきてくれないかしら。

ポンソンビー　もう用意はできています、奥様。

ソフィア夫人　まあ、お前は彼女が来るのを知っていたの？

ポンソンビー　今朝の『ポスト』で見ました、奥様。

ポンソンビー退場。

スプラット師　新聞は何と手際のいいことか。何でも知っている。

ライオネル　フィッツジェラルド夫人には、ご主人が亡くなって以来会っていません。

スプラット師　もう喪が明けたに違いない。

ソフィア夫人　それは、喪服が彼女にどれだけ似合ったかによると思うわ。

ライオネル　彼女は裕福なんですか？

スプラット師　夫が持っていたものはすべて彼女に遺したと聞いている。彼女の夫はみんなが思っているよりもどれだけ長く生きるかを考えることぐらいしかできなかったんだ。

ソフィア夫人　それは金持ちで年老いた夫の常だわ。

ライオネル　彼女は夫の金が目当てで結婚したんですか？

スプラット師　もちろんそうじゃない。フィッツジェラルド夫人は魅力的な女性で、そういうことはできっこない。彼を金と結び付けたんだ。

ライオネル　忙しい日でしたか、お父さん？

スプラット師　わたしはいつだって忙しいよ、お前。ところで、明日は二つ葬式があるのを忘れていないだろうね？

ライオネル　ええ、もちろん。

ソフィア夫人　わたしの知っている死体かしら？

スプラット師　［かなりショックを受けて］全く、お前には独特な表現方法があるんだね……。［目を輝かせて］実を言うと、一人の方はうちの魚屋だ。

ソフィア夫人　［すっかり満足して］どうりで、この二、三日、魚がよくないと思っていたのよ。

ポンソンビーが登場してフィッツジェラルド夫人の来訪を告げる。背の高い美人である。美しく着飾っている。その服装には半喪期であることを思わせるところはあるが、ソフィア夫人が怪しむように、哀悼の意を表わすというよりも美的な理由のために着ているように見える。自分の長所に敏感な自信家でユーモアに満ちた女だという印象を与える。

ポンソンビー　フィッツジェラルド夫人です。

ポンソンビー退場。フィッツジェラルド夫人はソフィア夫人に近寄ってキスする。

フィッツジェラルド夫人　やっと着いた！　疲れる旅だったわ。

ソフィア夫人　会えて嬉しいわ、メアリー。

フィッツジェラルド夫人　ねえソフィア、二日もここに泊まりに来させてくれてありがとう。

スプラット師　イギリスの職人がのろまなせいで、少なくとも一週間はあなたと一緒にいられるといいですね。

フィッツジェラルド夫人　［スプラット師と握手しながら］そう思ったら、洗濯物を送るわ。

スプラット師　その危険を冒すよう、お願いします。

フィッツジェラルド夫人　［スプラット師に手を握られながら］あなたに会うと、十歳若返った気がするわ、牧師様。

スプラット師　ああ、そんなこと言わないでください。あなたの父親みたいな気分になります。わたしの髪がどんなに白くなっているか見てください。

フィッツジェラルド夫人　［にっこりして］お似合いだわ。

ソフィア夫人　［ほほえみながら］ねえメアリー、来たそばからいちゃつかないでちょうだい。

フィッツジェラルド夫人　［陽気に］仕方がないわ。牧師様がわたしの劣情をすっかり呼び覚ますんですもの。

スプラット師　もう、あなたはわたしが年を取っているから全く心配ないと思って言っているだけなんだ。

フィッツジェラルド夫人　あら、そうとは限らないわ。ハンサムな人は髪が白くなりかけている時ほど危険なことはないのよ。

スプラット師　ライオネルを覚えていますか？　聖グレゴリー教会の副牧師ですがね。

フィッツジェラルド夫人　最後に会ってから随分立派になったわ。

ライオネル　あの時はいい子にしていただけです。

スプラット師　言っておきますが、ライオネルは結婚することを真剣に考えているんです。

ライオネル　［真っ赤になりながら］僕がですか、お父さん？　何を言っているんですか？

スプラット師　キューピッド君がお前のことで忙しくしていると、小鳥がわたしに囁いたんだ。さあさあ、年老いた父親に秘密を持ってはいけないよ。

ライオネル　何のことか本当に分かりません。

スプラット師　お前は否定するつもりか――ミス・グウェンドリン・デュラントを好意のある目で見ていたことを。

ソフィア夫人　グウェンドリンですって？

ライオネル　［まごついて］彼女のことは大好きですが、お父さん、彼女にはまだ何も言っていません。彼女も僕のことが好きだと思える理由がありませんから。

スプラット師　やれやれ、そうやって口説くんじゃないよ、お前。わたしが若かった頃は、若い女性が自分のことを好きな理由があるかなんて尋ねなかったものだ。自分の不面目をぺらぺらしゃべるのは恋人として愚かだ。

ライオネル　でも、僕はまだ完全には心が決まっていません。

スプラット師　それなら、心を決めるんだ、お前。結婚してもいい頃だ。古くからの名誉ある名前がお前にかかっているのを忘れないでくれ。お前の叔父さんはすぐには結婚しそうにもない。男の子を作って爵位を受け継ぐのがお前の義務だ。デュラント家が男の子を当てにするのは確かだ。

フィッツジェラルド夫人　［面白がって］ねえ牧師様、何でも考えるのね。

ライオネル　［懐中時計を取り出しながら］もう行かなければ。やることがいくつかあるんです。

スプラット師　わたしが話したことを忘れるなよ、ライオネル。弱気が美人を得たためしはないからな。

ライオネル　からかわないでください、お父さん。

ライオネル退場。

フィッツジェラルド夫人　かわいそうに、あの子を追っ払ってしまったわ。

スプラット師　わたしはライオネルに完全に満足な訳ではありません。無気力なんです。とても父親どころではありません。

フィッツジェラルド夫人　［ほほえみながら］ミス・デュラントのことをもっと教えてください。ビール醸造者の娘じゃなかったかしら？

スプラット師　［いささか弁解がましく］我々は少年時代とは違う世界に住んでいますからね。この頃は誰もが何にでも手を出したがります。

フィッツジェラルド夫人　それで、彼女はビール醸造者の娘なんですか？

スプラット師　少しも否定はしません。

ソフィア夫人　それがあなたの気持ち通りの縁組だとは思わなかったわ、セオドア。

スプラット師　ねえ、皮肉屋だと思われたくはないが、とてもいい娘はどこにでもいる。でも、本人が六、七万ポンド持っているようなとてもいい娘はどこのグーズベリーの木（イギリスでは「赤ん坊はどこから来たのか」という子供の問いに対して「赤ちゃんはグーズベリーの木の下で見つけたのよ」と答える。）でも育つ訳じゃないんだ。

ポンソンビー登場。

ポンソンビー　［ソフィア夫人に向かって］お電話です、奥様。

ソフィア夫人　そう、分かったわ。

ソフィア夫人は立ち上がって出て行く。ポンソンビー退場。

スプラット師　あなたがその若い女性をどう思うか、ご自分で確かめるチャンスを差し上げましょう。お茶に連れて来るよう、ウィニーに頼んであります。

フィッツジェラルド夫人　それじゃ、ウィニーのことを話してください。

スプラット師　むしろ、あなたのことを話したい。

フィッツジェラルド夫人　ねえあなた、わたしたちは知り合ってから長過ぎるわ。

スプラット師　それとこれとどんな関係が？

フィッツジェラルド夫人　あなたはわたしをいい気持ちにさせたいのよ。だけど、いい気持ちにさせるためには、人を喜ばせているのが少なくともしばらくは本心からだと信じられなければいけないわ。

スプラット師　わたしはおだてたりしません。いつも本心からです。
フィッツジェラルド夫人　わたしが知り合いの中であなたが一番どうしようもない嘘つきだと信じていることをあなたに隠したことはないわ。
スプラット師　あなたはすぐにわたしの気を楽にしてくれますね。
フィッツジェラルド夫人　でも、本当にそうしなければならないとなると、あなたはうまくやれるかもしれないわ。
スプラット師　何をですか？
フィッツジェラルド夫人　あなたの口から出かかっているお世辞のことよ。
スプラット師　［即座に］あなたは日ごとに美しくなりますね。
フィッツジェラルド夫人　あなたはかつてほど若くない未亡人にとってとても慰めになることをずばり言うのね。
スプラット師　あなたのような賢い女性には、遠回しに言っても時間の無駄になるだけでしょうからね。
フィッツジェラルド夫人　［参ったとばかり両手を上げて］全く、気をつけないとやりすぎるわよ。
スプラット師　ねえ奥方、わたしはいつもの調子が出てきているだけです。
フィッツジェラルド夫人　だとしたら、ソフィアが戻って来てくれてよかったわ。

フィッツジェラルド夫人がこのセリフを言うと、ソフィア夫人が部屋に入って来る。

ソフィア夫人　ウィニーがレーリングさんを連れてお茶に戻るって電話してきたわ。
フィッツジェラルド夫人　レーリングさんて、誰なの？
ソフィア夫人　ああ、セオドアが最近発見した人なの。
スプラット師　素晴らしく賢い青年で、わたしにとって非常に役に立つことになるでしょう。
ソフィア夫人　あなたの行動はいつもそういう利己的でない動機で決まるのね、セオドア。
スプラット師　「天は自ら助くるものを助く」だよ、ソフィア。
フィッツジェラルド夫人　そうだとすると、神は非常に忙しくしていなければならないわね。
スプラット師　レーリングさんはキリスト教社会主義者として知られています。この前の選挙で労働党のために議席を争いましたが、当選しませんでした。彼には見込みがあると思うので、何らかの励ましをするのがわたしの義務だと思います。社会主義が急速にこの国で大きな力になりつつあって、社会のあらゆる階層に枝を広げつつある昨今、それを教会に結集するのが我々の義務です。
ソフィア夫人　［穏やかに諌める口調で］セオドア、わたしたちしかいないのよ。
スプラット師　［遮られたのを無視して］わたしは何よりも時代に遅れないでいることが誇りです。前進向きのあらゆる活動によって、わたしが熱心な支持者であることが分かるでしょう。前イギリス大法官だったわたしの父は［肖像画に向かって腕を振る。］国民の来たるべき勢力を認めた最初の人でした。わたしはかつて

自分の家族が未来に関わったことを誇りに思います。前進はずっとわが家のモットーでした。前進と進歩です。

このセリフの間にスプラット卿が入って来て黙って聞いている。背が高くてでっぷりした頭のいい五十男である。どちらかと言えば騎手みたいな立派な服を着ている。

スプラット卿　お前の話は、まるで我々がイギリスを征服したみたいだ、セオドア。

スプラット師　［えらく仰々しく］わが家の源を見よ、トーマス。ビーチコームの二代目伯爵スプラット、レーリントン子爵、そしてグレートブリテン及びアイルランド連合王国のスプラット男爵だ。

スプラット卿　［フィッツジェラルド夫人と握手しながら］黙らっしゃい、セオドア。

スプラット師　ですけどね、貴族名鑑の『バーク』か『デブレット』でスプラットの名前を調べたことがありますか？

スプラット卿　何度も。スポーツ新聞に何も載っていない時は、貴族名鑑が最後に頼る素晴らしい読み物だと思うね。わたしの好きな小説だ。でも、ちっとも役には立たないよ、セオドア。スプラットの名前を持つ人間は、ヘースティングズの戦い（ウィリアム征服王がハロルド王を敗った）の時に先祖はいなかった。

スプラット師　当時の最も偉大な法律家だったわたしの父は家系を絶対的に信じていました。

スプラット卿　それを信じるなんて、彼は随分無知な老いぼれだったに違いない。ほかには、信じようとする人間に会ったことがない。全く、どうしてスプラットという名前の人間にモンモランシーという名前の先祖がいるのか、わたしには分からない。

スプラット師　あなたがオックスフォードにちょっとしかいなかったとしても、人間には誰でも父親がいることが分かるくらいには博物学を学んだと思っていました。

スプラット卿　セオドア、仮にスプラットという名前の人間にモンモランシーという名前の父親がいたとしても、それは言わぬが花だ。小うるさいことを言うようだが、わたしには本当だと思えない。

スプラット師　あなたの冗談は場違いです、トーマス。そういう趣味はどうかと思います。あなたが嘲笑って喜んでいる関係は完全に明白で完全に誇れるものです。一六三一年に、オーブリー・ド・モンモランシーが結婚して……。

ソフィア夫人　ああ、セオドア、セオドア、もうやめて。

ポンソンビーが『イブニング・スタンダード』を持って入って来てスプラット師に手渡す。

ポンソンビー　夕刊です、旦那様。

スプラット師　ああ、ありがとう。

ソフィア夫人　そうそう、セオドア、あなたが絶対に大笑いするニュースがあるの。今朝、

コルチェスターの主教が死んだわ。

スプラット師　トーマス、どうかもっと適切に意見を言ってください。［新聞を見ながら］チッ、チッ、チッ。実に悲しい。でも、とにかく、彼は長いこと健康がすぐれなかった。苦痛から解放されたんだ。

ソフィア夫人　彼に一度会ったことがあるの。とても立派な人だと思ったわ。

スプラット師　コルチェスターの主教がか？　ねえソフィア、そりゃもちろん、もう死んだんだから、彼に不利になるようなことは言いたくないが、我々の間で本当のことを言わなければならないとすると、彼はただの死に損ないだ。名門の出じゃない。

フィッツジェラルド夫人　誰が跡を継ぐのかしら。

スプラット卿　お前はしゃれ者で脛当てをつけているみたいだね、セオドア。［ソフィア夫人に向かって］違うかな？

ソフィア夫人　ねえトミー、兄の脚なんか、四十年見ていないわ。

スプラット師　ディナーでパトリシア・ピアーズ夫人に会う予定のちょうどその日にあの気の毒な老人が死ぬなんて、実に幸運だ。

スプラット卿　その人は一体誰なんだ？

スプラット師　やれやれ、貴族名鑑で調べたらどうですか？　首相の一番下の息子が後妻を迎えたことでできた伯母ですよ。そして、聖職者の任命権はすべて彼女の手中にあるんです。

スプラット卿　ゴルフ場が大丈夫だと確かめるまでは、主教の職は受けないでほしいね。

スプラット師　［皮肉っぽく］わたしを主教に登用するためには十八ホールのコースが絶対に必要だということを首相に言うつもりです。

玄関で呼び鈴の音が聞こえる。

ソフィア夫人　多分、ウィニーだわ。もう来るころですもの。

スプラット卿　彼女はどこに行っていたのかね？

スプラット師　我々の友人であるレーリングさんの演説を聴きに禁酒の会に行っていたんです。

フィッツジェラルド夫人　浮き浮きしているみたいに聞こえるわ。

スプラット師　おや、ウィニーがどうかしたんですか？　先日、『社会主義の未来』という本を貸してくれました。えらくためになりそうでした。

ソフィア夫人　読んだの？

スプラット卿　ためになるのは避けたい。

スプラット師　それはあなたの話からうんざりするほど明らかです。

ウィニーがグウェンドリン・デュラント、ハーバート・レーリングと一緒に入って来る。ウィニーは二十一のかわいい魅力的な娘で、流行のガウンを着ている。純真で汚れを知らず処女のようである。グウェンドリンはもう少し背が高く、より元気さに欠けるが、同じようなタイプであ

る。一、二歳年上である。ハーバート・レーリングはすべての点で二人の娘とは好対照である。女性を惹きつける美貌を明らかに誇示している。浅黒い肌に美しい目をして、若く、ロマンチックな風貌である。長すぎるほどの素敵な髪をしている。青いサージのスーツが気持ちよく体にフィットしていて、今の青年が夢にも思えないほどギリシャの神（男性美の典型）みたいに見える。ネクタイは無造作に結ばれている。知らない人たちの中にいる時に少しも恥ずかしがることはなく、その人たちをいくらか上から目線で眺めがちである。

ウィニー　わたしたち、お茶がとても飲みたくてたまらないんです。あら、フィッツジェラルド夫人だわ。

普通の挨拶が交わされる。ウィニーはフィッツジェラルド夫人と伯父のスプラット卿にキスする。グウェンドリンはソフィア夫人と握手する。

グウェンドリン　わたしはちょっとしかいられません。もう遅いですから。

ウィニー　［レーリングに向かって］わたしの伯父をご存じかしら？

スプラット卿　［レーリングと握手しながら］初めまして。

スプラット師　お会いできて嬉しいです、レーリングさん。あなたの会に行けなくて残念でした。ヴァルトブルク・ホッホスタインの王妃に会うために、カピット夫人とランチをご一緒しなければならなかったもので。聖職者は実際、時間が全く思い通りになりません。

スプラット卿　王妃にさえ悩み事があることは忘れられがちです。

スプラット師　［フィッツジェラルド夫人に向かって］レーリングさんを紹介させてください。

フィッツジェラルド夫人　初めまして。

スプラット師　レーリングさんはあの大いに話題になっている『社会主義の未来』の著者なんです。

フィッツジェラルド夫人　わたしには難し過ぎるんじゃないかしら。

レーリング　セント・アーミンズ公爵夫人が小説と同じくらい面白いとおっしゃいました。

スプラット師　それで、あなたの会は成功だったんですか？

ウィニー　［熱を込めて］聴衆を見せたかったわ、お父様。レーリングさんが話している間、ピンが落ちる音さえ聞こえなかったの。そして、終わると、ものすごい拍手喝采の嵐で、屋根が落ちてくるんじゃないかと思ったわ。

レーリング　聴衆はみなさんとても親切で非常に目が肥えていました。

スプラット師　雄弁さで人々の心を奪うことは素晴らしいことです。わたしの説教を聴きに来てください。

レーリング　ぜひそうしたいと思います。

スプラット師　「前進と進歩」がわたしのモットーでして。労働者階級の利益のために活動する時、我が家は常に先頭に立ってきたのです。

スプラット卿　モンモランシー家の時代から、前イギリス大法官だったわたしたちの父までです。

スプラット師　兄が極めて適切に思い起こさせてくれるように、わたしの先祖であるオーブリー・ド・モンモランシーは一六四二年に国民の自由のために戦っている最中に殺されました。そして、わたしたちが系統を引いている彼の二番目の息子は……。[ソフィア夫人が意味ありげに咳払いをするが、スプラット師は確固として続ける。]……あのカトリックの専制的な国王の圧政に抵抗したために、ジェイムズ二世に打ち首にされました。

ソフィア夫人　グウェンドリンが解放されたくて、ひと段落するのを待っているわ、セオドア。

スプラット師　[グウェンドリンの手を取りながら]もう行かなければならないんですか？あなたに一言も言うチャンスがありませんでした。

グウェンドリン　父が今夜酒屋の店主たちのところで演説することになっていて、わたしに聞いてほしいと言うんです。

スプラット師　とにかく、あなたを一目見ることができてよかった。

グウェンドリン　あなたはいつもそういう素敵なことをおっしゃるのね、牧師様。

スプラット師　素敵な人に対してだけですよ。

グウェンドリン　[レーリングに向かって]さようなら。あなたの講演はとても楽しかったわ。

レーリング　なるほどと思っていただけたのならいいのですが。

グウェンドリン　あら、わたしはなるほどとは思いませんでしたけど、それはわたしがアルコールで生計を立てているからですわ。でも、父が言うには、適量しか飲まない人の方が習慣的な大酒飲みよりもたくさん払ってくれるそうです。

レーリング　我々が転向させたいのは適量しか飲まない人です。習慣的な大酒飲みは法律で対処できますから。

グウェンドリン　ここに来るのに、あなたが父の新しいリムジンじゃなくてバスに乗ろうと言わなかったのが不思議ですわ。さようなら。

レーリング　[グウェンドリンが出て行くと]我々が禁酒運動の最も熱心な擁護者の一人を失ったことを新聞で見ました。

スプラット師　ええ、そうです。コルチェスターの主教ですね。彼のことはよく知っています。素晴らしい人でした。

レーリング　大きな損失になるでしょう。

スプラット師　そう、大きな損失です。訃報を聞いた時、傷心にたえませんでした。

スプラット卿　お前が感情を抑えているのは気づいていたよ、セオドア。

スプラット師　[遮られたのを無視して]彼がどんなに素晴らしい人間か、ソフィアに話していたところです。

レーリング　あなたが彼の跡を継ぐだろうという噂ですよ、スプラット牧師様。

スプラット師　わたしが？　そうなると、わたしは聖グレゴリー教会から離れなければならなくなります。どこで聞いたんですか？

レーリング　二、三の人から聞きました。

スプラット師　ほう。そうですか。そんなことを考えている人がいるなんて。
レーリング　あなたなしでここをどうするのか知りませんが。
スプラット師　もちろん、この世には余人に代えがたい人間なんていませんがね。
スプラット卿　セオドア、お前は謙虚すぎる。
スプラット師　わたしは自分がコルチェスターの主教ほど幅広く重要な主教の座につくのにふさわしいとは思っていません。
フィッツジェラルド夫人　［立ち上がりながら］わたしは自分の部屋に行こうと思います。とても疲れました。
スプラット師　お昼寝ですか、奥方？　長旅だったんでしょ？　でも、みずみずしく見えますよ。
フィッツジェラルド夫人　［頬をこすりながらにっこりして］こすり取れないわ。
ソフィア夫人　ご案内しましょうか？
フィッツジェラルド夫人　よろしいかしら？［レーリングと握手しながら］さようなら、あなたの本は必ず読みますわ。
レーリング　ありがとうございます。

フィッツジェラルド夫人はスプラット卿にうなずくと、ソフィア夫人に伴われて出て行く。スプラット師はレーリングが大法官の肖像画を見ているのを捕らえる。

スプラット師　おや、あなたはミレーが描いたわたしの父の肖像画に見とれていますね。いい男じゃありませんか？　いらっしゃい、サージェントが描いたわたしの肖像画をお見せしますよ。
レーリング　ぜひとも拝見したいものです。

二人は奥の部屋に入って行くが、見えたままである。スプラット師が絵のいい所を指摘するような身振りをしているのが見える。スプラット卿とウィニーは二人だけで残っている。

ウィニー　レーリングさんのことをどう思いますか？
スプラット卿　唯一食べ慣れていないのタイプの精神の臭いがするね。
ウィニー　一体どういうことですか？
スプラット卿　公共心だよ。
ウィニー　［もどかしそうに肩をすくめて］わたしは真面目な意見が聞きたかったのに。
スプラット卿　彼は統計をワイシャツの飾り袖全体に走り書きするタイプの男だ。だから、ワイシャツの飾り袖が取れても、わたしは驚かないよ。
ウィニー　どうして男性の飾り袖が女性の髪の毛と同じ程度に取れちゃいけないのか分からないわ。
スプラット卿　わたしには分かるよ。赤褐色のヘアピースは男性の優越性を示す証拠なんだ。それはわたしの見えるところで自分を愛想よく見せたいという美しい女性

の側の哀れな欲望を指し示している。取り外し可能なワイシャツの飾り袖はワイシャツの経済性を指し示しているだけだ。

ウィニー　わたしは彼が今まで会った中で最も素晴らしい人だと思うわ。

スプラット卿　そうなのか、本当に！　お父さんには言ったのかね？

ウィニー　［反抗的に］いいえ。でも、そのつもりよ。

スプラット卿　それはどういうことなんだろうか。

ウィニー　みんなわたしが子供だと思っている。誰もわたしが大人の女だということを分かっていないみたいだわ。

スプラット卿　何か馬鹿なことをしたい時、女性が大体誤解されていると言い張るのは気づいているよ。

ウィニー　どうして飾り袖が取れちゃいけないの？

スプラット卿　ねえ、理由なんか全然ないんだ。どうしてナイフでエンドウ豆を食べちゃいけないのか、どうして祖母を暗殺しちゃいけないのかもわたしには分からなかった。でも、そういうことに対する偏見があることは気づいている。

ウィニー　彼の演説を聴いたら、あなただってそんなつまらないことは言わないでしょうに。

スプラット卿　興奮している時とか緊張している時、必ずしも彼のHの発音が大丈夫でないと思うのは間違っているかね？

ウィニー　彼はわたしが知り合った中で最も偉大な紳士だわ。

ポンソンビーが登場し、スプラット師とレーリングが後ろの客間から出て来るのに出くわす。

ポンソンビー　ロックスハム卿がお着きになりました、旦那様。

スプラット師　おお……！［明らかに出て行ってもらいたそうにレーリングを見る。］図書室にご案内したのか？

ポンソンビー　はい、旦那様。

スプラット師　それでは……ちょっと待つように言ってくれ。

ポンソンビー　かしこまりました、旦那様。

レーリングはスプラット師が忙しいのを理解して手を差し出す。スプラット師はほっとしてその手を取る。

レーリング　わたしはもうおいとましようと思います。

スプラット師　何ですって、もう行かなければならないんですか？　それはそれは、お忙しいんでしょうね。

レーリング　［スプラット卿と握手しながら］さようなら。

スプラット師　［レーリングを急き立てながら］すぐにまた会いに来ていただかなければ。あなたとはじっくりお話ししたい。ああ、ポンソンビー。

スプラット師はポンソンビーのところに行って小声で話す。スプラット卿はかこつけて夕刊を手に取り、レーリングがウィニーのところへ行ってさよならを言うのを見つめる。

ウィニー　さようなら。みんな悪い人たちじゃないのよ。
レーリング　皆さんとても親切だ。
ウィニー　みんなあなたを好きになると思うわ。明日お会いできるわよね？
レーリング　その時までほかのことは何も考えられないだろう。
ウィニー　あなたがわたしにためにしてくれたことにどんなに感謝しているか、改めて言わせてちょうだい。
レーリング　僕は何もしていないよ。
ウィニー　わたしはあなたのお仕事をお手伝いしたいの。一緒にお仕事をしたいの。
レーリング　今日僕がうまく話せたとしたら、それは君の目が僕に注がれているのを感じていたからだよ。
ウィニー　さようなら。

レーリングが出て行く時、スプラット師は心を込めて握手する。

スプラット師　ではでは。ぜひわたしが説教するのを聴きに来てください。ああ、ソフィアだ。

ソフィア夫人が入って来る。

スプラット師　レーリングさんはもう我々といる時間がないそうだ。わたしが説教するのを聴きに来てくれるよう話していたところなんだ。
ソフィア夫人　［ほほえみながら握手して］あら、そうなの。
スプラット師　あなたは長いことわたしが説教するのを聴いたことがありませんね、トーマス。

レーリングは出て行く。

スプラット卿　なあ、セオドア、お前がほかにやることがあるなんて、聞いたことがない。
スプラット師　それはあなたの取るべき立場ではありませんよ、トーマス。
スプラット卿　こういう社会主義的な時代だから、わたしは自分の立場を見せかけだと思って冗談を言っているだけなんだ。
スプラット師　賢い人だ。大好きだよ。実に素晴らしいよね、ソフィア？
ソフィア夫人　ねえセオドア、どうしてわたしに判断できるの？　あなたは決して彼に口をはさませないわ。彼は賢い聴き手みたいね。
スプラット師　ソフィア、間違っているかもしれないが、わたしが会話の公正な自分の取

り分より多くを取ったといって非難した人はいなかったよ。

ソフィア夫人　そうでしょうね。

スプラット師　［娘の方を振り向いて］ああ、ウィニー、『タイムズ』を取って来てくれるかな。図書室にあるんだ。

ウィニー　よろしいですとも。

ウィニーはドアの方に向かって行き、突然立ち止まる。

ウィニー　あそこにはロックスハム卿がいるって、ポンソンビーが言ってなかったかしら？

スプラット師　［ほほえみながら］そうだったな。

ウィニー　それなのに……。

スプラット師　わたしの大間違いでなければ、彼はお前に会うためにあそこで待っているんだよ。

ウィニー　わたしを？　一体何がお望みなの？

スプラット師　［ウィニーの方に行って、肩に腕を回しながら］それは自分で言うだろうよ、お前。

ウィニー　［尻込みしながら］でも、会うことはできない。会いたくないもの。

スプラット師　［ウィニーをドアのところまで連れて行きながら］お前が恥ずかしがるのはよく分かる……。

ウィニー　［遮って］でも、最初に言っておかなければいけないことがあるの。説明させてちょうだい。

スプラット師　［上機嫌で］説明することなんかないよ、お前。わたしはすべて承知しているから。緊張する必要はない。わたしも大賛成だと思って行きなさい。

ウィニー　お願いだから、わたしに話させて。

スプラット師　さあさあ、お前。勇気を出すんだ。何も怖いことはない。いい子だから、下に行って、ロックスハム卿を連れて来なさい。

スプラット師はドアを開けてほとんど押すようにしてウィニー外に出す。それから、両手をこすって笑いながら戻って来る。

スプラット師　ちょっとした乙女らしいしとやかさだ。実に惚れ惚れする。実にかわいい。美しい姿だろ、なあソフィア、乙女らしい純真さで顔中を赤らめている典型的なクリーム色のイギリス娘の姿は。

ソフィア夫人　馬鹿馬鹿しいわ、セオドア。

スプラット師　［上機嫌で］お前は皮肉屋だね、ソフィア。そこがお前に直してもらいたい大いなる欠点だ。

ソフィア夫人　［頭を上げてつんとしながら］わたしに説教しないでちょうだい、セオドア。

スプラット師　預言者が敬われないのはその故郷だけ。英雄も近侍にはただの人。

スプラット卿　お前ならその話題について感動的な説教ができるだろうね、セオドア。

スプラット師　トーマス、こう言ってよければ、公的な立場のあなたに話したい。一家の長として……。

スプラット卿　［遮って］なあセオドア、それは慣例にすぎない。わたしはふさわしくないんだ……。

スプラット師　その事実は取り消しのきかない特権です。でも、今、我が家の状況が危うい時に、できるだけ真面目さと礼儀正しさを取ってもらえればありがたい。

スプラット卿　おっと、戴冠式の礼服を着ていればよかったのだが。

ソフィア夫人　続けて、セオドア、わたしたちを待たせないでちょうだい。

スプラット師　よろしい、ロックスハム卿がウィニーに求婚する許可をわたしに求めたと聞けば、二人とも喜ぶだろう。

スプラット卿　そして、お前は彼にくらいついて「もちろんです」と言ったんだ。

スプラット師　［ぎょっとして］義理の息子として彼に異論はないことを知らせて、彼の境遇を調べました。

スプラット卿　彼に年三万ポンドの収入があることは誰もが知っているというのに、何て厚かましいんだ。

スプラット師　［兄を無視して］そして、ついにウィニーが心からの愛情で彼を見ているとわたしが確信していることを彼に伝えました。

スプラット卿　お前は抜け目のないおやじだ、セオドア。

スプラット師　あなたがこの問題を礼儀正しく扱うとは思っていませんでした、トーマス。だから、あなたにいてほしかったのは、我が家の長としてのあなたに対する強い義務感からだけです。

スプラット卿　［少しも気まり悪がらずに］黙るんだ、セオドア。ロックスハムが我々のような人間に対して侮辱とも言えるようなことをするのはお前もよく知っている。州の半分を持っている二十一代目のロックスハム卿と二代目のスプラット聖堂参事会会員にはえらい違いがあるんだ。

スプラット師　［非常に威厳を持って］これを限りにあなたに分かってもらいたいのですが、トーマス、わたしは我が家に関してあなたが好んで用いるその嘲笑うような態度には大いに反対です。わたしは前イギリス大法官の息子であり、名高い銀行家の孫であることを誇りに思っています。

ソフィア夫人　馬鹿馬鹿しいわ、セオドア。わたしたちの祖父が証券業者、それもかなりいかがわしい証券業者だったことは、あなたもよく分かっているでしょ。

スプラット師　そんなことはない。祖父は非常に上品で洗練された紳士だった。

ソフィア夫人　わたしはよく覚えている。家では、いつもパーティーの翌日に祖父を夕食に誘って残り物を平らげたわ。無事に亡くなって埋葬されるまで、祖父が名高い銀行家だなんて思った人がいなかったのは確かだと思う。

スプラット卿　それは証券業をやっていからだ。あのおやじはちょっとした高利貸もやっていたと思う。人を騙そうとしても無駄だ、セオドア、みんな信じない。

ソフィア夫人　［非常に面白がって］それで、証券業者のパパはどうなの、セオドア？

スプラット卿　そこでモンモランシー家が登場する訳だ。

スプラット師　［ひどく勿体ぶって］実を言うと、わたしは曾祖父がどんな人間だったかよくは知らない。しかし、紳士だったことは分かる。

ソフィア夫人　ねえ、わたしは曽祖父は八百屋だったんじゃないかとずっと秘かに思っていたの。

スプラット卿　ああ、それならモンモランシー家よりましだ、確かに。あの先祖代々の八百屋は――ベッドフォード・スクエアのディナーパーティーの給仕をするために出掛けて行って、誰も見ていないと年代物のシェリー酒をこっそり飲んでいた。

スプラット師　トーマス、あなたにはそういうことをロックスハムに言わないだけの分別と礼儀正しさを持ってもらいたい。そういうことに関して、彼はとても敏感ですから。

スプラット卿　ところで、ウィニーが断ったら何と言うつもりなんだ？

スプラット師　何ですって！　そんな馬鹿な！　どうしてあの子が？　彼は結婚するのにかっこうな青年だし、わたしが完全に賛成しているんですよ。

スプラット卿　もしあの子があの社会主義者のジョニーと結婚しようと思ったら？

スプラット師　若造のレーリングと？　馬鹿馬鹿しい。

スプラット卿　お前も馬鹿馬鹿しいと思うかね、ソフィア？

ソフィア夫人　［肩をすくめて］父親が父親ですもの。

スプラット師　どうするのが自分と家族のためになるか、娘は分かっている。若いかもしれないが、お前の中に見て嬉しくなるような威厳を保とうという意識がある。我が家のモットーを思い出してくれ。「マーロー・モリー・クワム・フォエダーリー（ラテン語、Malo mori quam foedari）」――「わたしは辱められることより死ぬのを好む」だ。

スプラット卿　常々わたしはそれが高いものにつくと思っている。

スプラット師　もちろん、立派な考えはあなたの下品な言葉を呼び起こすだけでしょう。

スプラット卿　なあセオドア、わたしは家族の書類の内、領収書を持っている。

ソフィア夫人　わたしたちが紋章を取り付けていた時の父と母の議論をよく覚えているわ。母はうちの紋章は頭をもたげてうずくまったライオンでなければいけないと思っていたけど、父は言ったの。「本当に、お前、もしわたしが自分の仲間を起き上がらせていなかったら、大法官にはなれなかっただろう。わたしは立ち上がったライオンをつけるつもりだから、紋章院（紋章認可や、紋章と家系図の記録保管などの事務を統轄する）なんか糞食らえだ」って。

スプラット師　わたしにはその話の要点がちっとも分からないよ、ソフィア。我が家の紋章はイギリスの高貴な家柄の半分と同じように本当の紋章なんだ。

ソフィア夫人　［ほほえみながら］ええ、そうよ。そんなことぐらい分かってるわ。

ウィニーが入って来る。顔が青ざめて悲しそうである。スプラット師はウィニーのところまで行って両腕に抱く。

スプラット師　おお、いい子だ、いい子だ……。だが、ロックスハム卿はどこなんだ？　どうして連れて上がらなかったんだ？

ウィニー　［振り解きながら］お父さん、ロックスハム卿に結婚を申し込まれたの。

スプラット師　わたしの完全な賛成を得て、彼はそうしたんだ。

ウィニー　それで、わたしは――わたしは何か言わなければならなくて。断ったわ、お父さん。

スプラット師　［びっくりして後ずさりしながら］何だって！　冗談だろ。ああ、間違ってる。わたしは認めないぞ。彼はどこにいるんだ？

スプラット師はドアに向かって行く。

ウィニー　［とっさに］何をしているの？　もう帰ったわ。

スプラット師　［険しい顔で戻って来ながら］お前は冗談を言っているんだろ、ウィニー。そういう冗談にはあきれるよ。

ウィニー　わたしはもう婚約しているんです。

スプラット師　お前が……？　それで、誰と、一体？

ウィニー　わたしはバートラム・レーリングと婚約しているの。

スプラット師　何てことだ！

スプラット卿はくすくす笑いをかみ殺す。

スプラット師　［怒ってスプラット卿を振り向きながら］あなたがいない方がこの問題を進められると思います。援助や同情や、貴族や紳士が持ち合わせている感情をあなたに期待できないのが残念です。出て行っていただけたら感謝します。

スプラット卿　［機嫌良く］いいとも、セオドア。お前が恥をさらすのを見たくないからな。さようなら、ソフィア。

スプラット卿はソフィア夫人にキスする。スプラット卿が握手しようとスプラット師の方へ行くと、スプラット師は怒って顔をそむける。スプラット卿はにっこりしてウィニーのところへ行き、肩に手を置く。

スプラット卿　気にするな、ウィニー、いい子だ。結婚したい人と結婚しなさい。騙されてほかの人を受け入れないようにするんだ。どんな無分別なことでも、わたしはずっとお前を支持するよ。

ウィニー　無分別じゃないわ。

スプラット卿　ところで、結婚式では彼にフロックコートは着せるなよ。彼の脚はちょっとばかり短すぎると思うんだ。ずんぐりして見えるだろうからな。

ウィニー　彼が着る物を気にすると思う？　服なんか眼中にないわ。

スプラット卿　服の様子から、彼はそういう精神の持ち主じゃないかと思ったよ。［スプラット師に向かって］お邪魔だったかな？

スプラット師　あなたの時間よりわたしの時間の方が貴重だと思ってもらうことは期待できませんね。

スプラット卿　では、さようなら。お前たちが半時間ばかり楽しく過ごせるといいね。

スプラット卿は出て行く。

スプラット師　さてと、どういうことなんだ、ウィニー？　お前は真剣だということか？

ウィニー　その通りよ。

スプラット師　全くとんでもない話だ。無一文で無名の三文文士と結婚すると本気で言ってるのか？

ウィニー　彼のことをそんなふうに言うのは随分不公平だわ、お父さん、『社会主義の未来』があるのに。

スプラット師　どんな馬鹿でも本ぐらい書ける。書くのに賢い人間は必要ない……。誰も彼のことを知らない。ごろつきのやくざ者だ。

ウィニー　お父さん、彼は優れた知性の持ち主だって、あなたが言ったのよ。感服するとも言ったわ。

スプラット師　それはわたしが行儀がよいというだけのことだ。母親に赤ん坊を見せられたら、かわいい子だと言うよ。かわいい子だと思わずに、実に醜い子だと思ってもだ。見分けがつかなくても、確かに父親にそっくりだとその母親に言う。そんなのはただのありふれたお世辞だ……。その馬鹿げたことはどのくらい続いているんだ？

ウィニー　彼とは昨日婚約したの。

スプラット師　分かるだろ、ソフィア、わたしは相談を受けていないんだ。

ソフィア夫人　［穏やかに］馬鹿なこと言わないで、セオドア。

ウィニー　ああ、分からないの、お父さん？　彼がわたしのためにしてくれたことなんか想像もつかないんだわ。わたしが知っていることは全部彼が教えてくれたことなの。今のわたしがあるのは彼のお陰なのよ。

スプラット師　どのくらいの間、彼と付き合う光栄に浴しているんだ？

ウィニー　六週間よ。

スプラット師　まさか。

ウィニー　わたしは馬鹿だった。ほかの娘と同じだった。似合う帽子を手にしたら、一週間幸せでいられた。そうしたら、彼に出会って、すべてが変わった。彼はわたしのことを馬鹿な娘だと思って、大人の女にしてくれた。わたしは彼のことがとても誇らしいし、すごく感謝しているの。彼はわたしが初めて会った本当の男だわ。

スプラット師　お前が彼の中に何を見つけたのか知りたいものだ。ロックスハムの中に見つけられないもの、あるいは――父親の中に見つけられないものとは？

ウィニー　わたしはハリー・ロックスハムを愛していない。

スプラット師　馬鹿馬鹿しい！　お前の年頃の娘に愛が何であるかなんて分かるはずがない。

ウィニー　ハリー・ロックスハムは妻を奴隷に、退屈であきあきした時の慰みものにしたいのよ。わたしは夫の仲間になりたい。夫と一緒に働きたいのよ。

スプラット師　お前がそんな考えを持っていると聞いて、びっくりだしショックだよ、ウィニー。お前はもっと慎み深いと思っていた。

ウィニー　分かろうとしないのよ、お父さんは。わたしにはわたしなり人生があって、わたしなりのやり方で生きなければならないということが分からないの？

スプラット師　お前はどうしようもなく時代遅れだ。「新しい女」（十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて男性優位社会の打破と女性の地位向上を訴えた女性たち）はドードー（ガチョウほどの大きさの飛べない鳥）と同じように絶滅している。お前の考えは愚かなだけではなく、中産階級的だ。そういうのにはうんざりだ。

ウィニー　あなたはわたしをひどく不幸にしようとしているのよ、お父さん。

スプラット師　馬鹿なこと言うな。お前をロックスハム卿と結婚させることはできない。お前の愛情を強制するつもりは全くない。正直言って、がっかりだ。しかしながら、神の意志と受け止めて、耐えるために最善を尽くそう。だが、お前がバートラム・レーリング氏と結婚することが神の意志でないことは確かだと思う。あの男は財産目当ての求婚者にすぎない。

ウィニー　違うわ、お父さん。

ソフィア夫人　［上機嫌で］そんなににべもなくお父さんに逆らう必要はないと思うわ。終わった訳じゃないんだから。

ウィニー　お父さんにわたしが全世界よりも愛する人をののしる権利はないわ。

スプラット師　お前の話は馬鹿げている。お前は実に聞き分けがなくて情のない娘だ。

ウィニー　だって、これはわたしだけの問題よ。わたしの幸せにかかわることですもの。

スプラット師　お前は何て自分本位なんだ。わたしの幸せを考えていない。

ウィニー　わたしはバートラムと結婚するって決めたの。わたしは二十一を超えたから自由よ。

スプラット師　それはどういうことだ、ウィニー？

ウィニー　同意してくれないのなら、同意なしで結婚するわ。

スプラット師はびっくり仰天する。憤然として行ったり来たりする。

スプラット師　子供たちに惜しみなく与えた愛情の見返りがこれだ。何年もの間、子供たちの気まぐれのために自分を犠牲にしてきたというのに。その報酬がこれだ。

ソフィア夫人　［ウィニーに向かって］それで、あなたはその青年の何を知っているの？生活していく手立てはあるの？

ウィニー　わたしたち二人とも一生懸命働くわ。彼が稼ぐものとわたしが母からもらったわずかなもので、王様のような生活ができるもの。

スプラット師　ウエストケンジントンのアパートか、ホーンジーライズの郊外住宅でだろ。

ウィニー　愛する人と一緒なら、掘っ建て小屋にだって住めるわ。

スプラット師　やったみるまではそう思いがちだ。

ソフィア夫人　もちろん、そういう種類の人については微妙な質問だけど、父親はいたの、

それとも、ひとりでに生まれたの？

ウィニー　［反抗的に］父親は何年も前に死んだわ。彼はニューカッスルから石炭を運んで来る船の一等航海士だったのよ。

ソフィア夫人　わたしが思うに、職業として、それではお金にもならないし清潔でもなかったわね。

スプラット師　少なくとも、親族が死んでいることには感謝するだけのことはある。

ウィニー　母親と妹がいるわ。

スプラット師　それはどんな連中か、知りたいものだ？

ウィニー　わたしは知らないけど、気にしないわ。母親があまり高い教育を受けた人でないことは聞いているけど。

スプラット師　どこに住んでいるんだ？

ウィニー　ペッカムに小さな家を持っているの。

スプラット師　ぞっとする。それ以上、何も聞きたくないね。

スプラット師はドアに向かって行くが、ウィニーが止める。

ウィニー　お父さん、行かないで。怒らないで。あなたはわたしを愛しているし、わたしもあなたを愛しているの、バートラムの次に、世界中の誰よりもね。

スプラット師　わたしを愛しているのなら、ウィニー、どうしてお前がわたしにこのような苦しみをもたらすのかが分からない。わたしはお前の考えに任せなければならない。お前は恩知らずで反抗的で薄情だ。お前が愚かで醜いと思うとまで言わないのは、単なる女性に対する配慮と死んだ母親の思い出に対する敬意からだ。お前は自分の部屋に行ってくれ。

一言も言わずにウィニーは出て行く。

スプラット師　蛇の歯よりもいかに鋭いことか……。（シェイクスピア、感謝することを知らぬ子供を持つことを指す）

スプラット師は、スプラット卿が床に落とした夕刊を乱暴に蹴飛ばす。見て拾い上げる。

スプラット師　ソフィア、わたしの代わりにウィルソン宛ての手紙を書いてもらいたい。

ソフィア夫人　［机に着きながら］ウィルソンて誰？

スプラット師　新聞記者だ。二、三の重要な新聞のために聖職者としての頭を働かせている。

ソフィア夫人　そうなの？

スプラット師　［口述しながら］「親愛なるウィルソン様。わたくしが空いているコルチェスターの主教の職を持ちかけられているという噂は本当ではないということをあなた様の価値ある新聞にて発表してくださいますようお願い申し上げます。

自己宣伝の昨今、自分自身か友人が列せられると期待している地位について黙っていることを要求するのは無理かと思われます。しかし、そうする方が礼節にかなって分別があると思わざるを得ません。敬具。」

ソフィア夫人　［のけぞりながらにっこりして］あなたも随分抜け目のないおやじだわね、セオドア？

スプラット師　何のことだね、ソフィア。

第一幕終わり

第二幕

場は前幕と同じ、聖グレゴリー牧師館の客間。ソフィア夫人が書き物机で手紙を書いている。相変わらず人当たりがよく、ぱりっとしててきぱきしているスプラット師が新聞を手にして入って来る。

スプラット師　元気か、ソフィア？

ソフィア夫人　［立ち上がりながら］ええ、もちろん、今日は会ってなかったわね。

スプラット師はソフィア夫人の頬にキスする。

スプラット師　文芸クラブで昼食を取ったんだが、みんなわたしがコルチェスターに行くと思っている。今朝の新聞の告知を見たか？

ソフィア夫人　まだ読む暇がなくて。

スプラット師　もっとわたしに関心を持ってもらいたい。新聞にわたしのことが載っているのに、みんなが見て、わたしの家族が見ないのはおかしい。

ソフィア夫人　［上機嫌で］何が載っているのか教えてちょうだい。

スプラット師　［読みながら］「サウスケンジントン、聖グレゴリー教会の教区牧師、スプラット聖堂参事会会員が空いているコルチェスターの主教の職に指名されたという噂は本当ではない。」

ソフィア夫人　［冷ややかに］より優れた候補者がいないということを権限のある人たちに思い出させるのは確かね。

スプラット師　ねえソフィア、正直言って、わたしのことを自惚れの強い人間だと言う者はいないと思うが、わたしは自分がその職にふさわしくないとは思えない。お前がわたしの家柄が国に要求できる確実な権利を与えてくれることを否定する最後の人間であることは確かだと思う。

ソフィア夫人　［冷ややかな笑みを浮かべて］昨日の夜、あなたがパトリシア夫人に会った時、どっちを指し示すように気を配ったのかしら？

スプラット師　いや、そんな。わたしは慎重そのものだった。わたしはただ会話の途中で主教に保守的な道理を吹き込むことがどんなに重要かということを説明しただけだ。

ソフィア夫人　それで、彼女が餌に食いついたと思う？

スプラット師　ねえ、お前はそんな野蛮な言い方をしないといいのだが。

ソフィア夫人　［そっくり返ってスプラット師を批判的に見ながら］あなたは他人を騙すのと同じように自分も騙しているのか、わたしはよく不思議に思うの。

スプラット師　おやおや、何のことか分からんね。わたしはいつだって、慈悲深い神が好んでわたしを置いた地位で義務を果たしてきた。自惚れなしに言わせてもらえば、わたしはそれを自分の喜びと人類の利益のためにやってきたんだ。

ソフィア夫人　昔うちにいた看護婦を覚えてる、セオドア？

スプラット師　彼女の愛情はわたしの幼い頃の最も素敵な思い出の一つだ。

ソフィア夫人　彼女は性格について素晴らしい判断力を持っていたに違いないって、わたしはいつも思うの。彼女が何度となく言っていたのを覚えてるわ。「セオドアお坊ちゃま、自画自賛は推薦にはなりませんよ」ってね。

スプラット師　お前が妙な記憶力を持っているのは確かだ。今、彼女が何度となく言っていたのを思い出した。「ソフィアお嬢ちゃま、鼻をかまなければいけません」ってね。

ソフィア夫人　［つんとしてそり身になって］彼女は教育のない女だったからよ、セオドア。

スプラット師　それこそ正にお前の回想がわたしに信じさせたものだ。

ソフィア夫人　ふん！

スプラット卿とフィッツジェラルド夫人登場。

スプラット師　ああ、奥方、これは予期せぬ喜びだ。あなたは外出中だと思っていました。

フィッツジェラルド夫人　わたしが買い物に飽きて、家に向かって公園を通っていたら、スプラット卿を見かけたので、いたずらをさせないように一緒に連れて帰りましたの。

スプラット卿　わたしはさんざん苦労していたずらすることしかできない年になってしまって、うまくいっても割に合わないんだ。

ソフィア夫人　［スプラット卿に向かって］先日、セオドアはあなたを容赦なく家から追い出したわね、トム。

スプラット師　悪く思わないでもらいたい。

スプラット卿　ちっとも、セオドア。わたしにキリスト教精神があるだけでなく、お前には素晴らしいコックがいるからな。

ソフィア夫人　ウィニーはレーリングさんとの結婚を決めたみたいよ。

フィッツジェラルド夫人　とてもロマンチックだと思わずにはいられないわね。親愛なるテニソン卿のあの詩を思い出すわ。

スプラット師　親愛なるテニソン卿に年頃の娘はいませんでしたよ。

フィッツジェラルド夫人　若い二人が好き合っているのに、どんな不都合があっても結婚させるのが一番いいと思わないの？

ソフィア夫人　相手が紳士ですらないのよ。

フィッツジェラルド夫人　でも、「優しき心は宝冠にまさる」ということをわたしたちは自分にうるさく言い聞かせてきたわ。

スプラット師　ええ、でも、決してそんなことはないことを我々はみんな知っています。

スプラット卿　お前はどうするつもりなんだ、セオドア？

スプラット師　わたしはウィニーにあの馬鹿な店員との馬鹿げた婚約を破棄させると約束します。それだけでなく、ロックスハムと結婚させると約束します。

フィッツジェラルド夫人　［ほほえみながら］それを全部成し遂げるためには巧みな手腕が必要ね。

スプラット師　セオドア・スプラットに勝つためには、朝早く起きなければなりません。
ソフィア夫人　何を考えているの、セオドア？
スプラット師　ない知恵を絞っているんだ。何も思いつかない。あの子がロックスハムを断わるなんてけしからん。彼は娘が幸せになるために望めるものはすべて持っている。最高の要素を持っているんだ。
スプラット卿　それに、十分な収入もな。
スプラット師　彼はまだ若いが、上院で尊敬され保証されている地位を得ている。
スプラット卿　我々がみんな自分のことを真摯に受け止めないのは幸いだ。つまり、昨今はイギリス国民が出し惜しみしない唯一の命令を我々は大昔に受け取ってしかるべきだった。
フィッツジェラルド夫人　それは何ですか？
スプラット師　解雇命令ですよ。

フィッツジェラルド夫人は小さなさざなみのように笑う。

スプラット師　ああ、笑わないで。彼のこの嘆かわしい軽薄さを助長しないでください。［スプラット卿に向かって］あなたのような人が上院の評判を悪くしたんです。
スプラット卿　わたしのような人間がか、セオドア？　いいや、わたしはその古臭い場所をわざと避けるという単純な方法で長年支えてきたんだ。
スプラット師　へーえ。
スプラット卿　我々が射撃と狩猟と釣りを続けている限り、邪魔をする人間はいないからな。先日、上院に行ったよ。
スプラット師　それはびっくりです。
スプラット卿　ああ、全くの偶然だが。仕事でウェストミンスターに行かなければならなくてね。
スプラット師　驚きの種は尽きませんね。
スプラット卿　ある人が売りたがっているテリア犬を見なければならなくてね。それで、新しいシルクハットを被って傘は持っていないのに、そう、雨が降り始めた。全く、わたしは言った、十分で法律を制定しになんか誰が行くもんかと。それでも、わたしが中に入ると、一体あなたは誰なのかと聞く奴がいた。全く、わたしは恥ずかしくて言えないほどだった。スプラットというのは警官に伝えなければならないとなると実に厄介な名前だ。悪ふざけみたいに聞こえる。
スプラット師　バラはどんな名前で呼んでも良い香りがするもんです。
スプラット卿　それで、ちょっとの間中に入れてもらうと、老いぼれが二十人、赤いベンチでぶらぶらしていた。全く、わたしは言った、彼らの仕立屋は誰なんだ？　わたしはちょっとの間、おかしな老いぼれが顎鬚の中で絶えずぶつぶつ言っているのを聞いてから、自分に向かって言った。わたしはここにいてこの無駄話を聞こうか、それとも、帽子を濡らそうか。突然、わたしはひらめいた。そうだ、わたしは思った、タクシーを拾おうと。
スプラット師　あなたの軽率さは日ごとに著しくなっていますね、トーマス。わたしはそ

れが主に若気の至りだといいと思ったものですが、年を重ねてもあなたには責任感がもたらされないみたいです。

スプラット卿　弟にからかわれても耐えているということは、わたしがどんなに魅力的な性質を持っているかということを示している。今更、長男の身分が聞いてあきれる！

スプラット師　あなたが否定的に話しているのは、あなたの名前ばかりではなくわたしの名前でもあることをお忘れだ。

スプラット卿　スプラットという名前のことか？

スプラット師　前イギリス大法官によって持たされた名前です。

スプラット卿　ああ、セオドア、二度と彼のことは持ち出さないでくれ。もううんざりだ。地位のある人間の息子だということがわたしの人生の災いだった。つまり、彼があの馬鹿な老いぼれの上院議長になったのは運が悪かったというしかない。

スプラット師　「デ・モルトイース・ニラ・ニーシ・ボヌム（ラテン語、de mortuis nil nisi bonum、死んだ人のことを悪く言うなの意）」という格言を聞いたことがありませんか？

スプラット卿　それは「老いぼれがバケツを蹴飛ばした時、その脚を引っ張るな」という意味だ。

スプラット師　［もどかしげに］あなたには礼儀の意識も思いやりの感覚も品位もない。

スプラット卿　実を言うと、わたしは全く重要だと思わない。そういう見かけ倒しのものには我慢ならない。見せかけの紋章やいんちきな家系に基づく馬鹿馬鹿しい爵位は欲しくない。それに、あの馬鹿馬鹿しい白テン（イタチ科の動物）の毛皮の礼服もだ。考えるだけでも鳥肌が立つ。わたしがただのトム・スプラットだったら、どんなによかっただろう。かなりいい馬商になっていたかもしれないし、それだけの頭がなかったとしても、いつだって下院議員にはなれただろう。わたしは軍艦と石炭船を見分けられないから、立派な海軍大臣になっていただろう。

呼び鈴が聞こえて、スプラット師はびくりとする。

スプラット師　おおっ、何だあれは！

フィッツジェラルド夫人　ねえ牧師様、あなたの神経はどうかしているわ。

スプラット師　正面玄関だ。

フィッツジェラルド夫人　呼び鈴が鳴ると、あなたはいつも跳び上がるの？

スプラット卿　借金取りだったら、わたしに会わせてくれ、セオドア。そういう獣みたいな連中を扱うのには慣れているから。

スプラット師　お願いだから、冗談は言わないで、トーマス。

ソフィア夫人　どうしたの、セオドア？

スプラット師　呼び鈴が鳴ったら、首相からのメッセージかもしれないのが分からないのか？　手紙にしろ、電報にしろ。どうして分かる？　でも、とにかく空いている主教職の提示だ。前回空きがあった時、次は頼むと実際彼は確かに言ったん

だ。

ソフィア夫人　恐らく、彼はイギリスの校長の半分に対して同じことをやっているわ。

スプラット師　馬鹿な！　そんなふうに考える人間がいるだろうか？　わたしが持っている資格の半分も持っている人間はいない。それに、トム・ノディーは馬鹿な生徒連中にラテン語の詩を教えていたのだから、主教の職を与えるのは全く馬鹿げたやり方だ。前イギリス大法官の末息子として、国に期待するものがあってもいいと思う。わたしは予感がする。コルチェスターがわたしに提示される予感がするんだ。

スプラット卿　その場合、お前が受け入れる予感がする。

フィッツジェラルド夫人　［ほほえみながら］あなたはわたしが知り合った中で一番野心的な人だわ。

スプラット師　だとしたら？　野心は、エイボンの白鳥曰く、高潔な精神に最もふさわしくない弱点である。（「エイボンの白鳥」はシェイクスピアを指しているが、これは『ピーターパン』の作者ジェームス・マシュー・バリーの言葉）でも、今更野心が何の役に立つんですか？　わたしは主教がその手のひらにヨーロッパの運命を握っていた四世紀前に生きるべきでした。わたしは自分の中に偉大なことをやる力を感じます。時々、椅子に座っていると、行動を起こしていないことに耐えられなくなりそうなことがあります。困ったことに、わたしがやるべきことは何ですか？　今風の連中に説教をすること、委員会で議長を務めること、メイフェアのディナーパーティーに行くことです。わたしは生まれてくるのが遅すぎました。階段にポンソンビーがいるのが聞こえる。

ドアが開いてポンソンビーが登場すると、スプラット師は半ば無意識に首相からのメッセージを期待している時に取るような態度を取る。

ポンソンビー　ミス・デュラントです。

スプラット師は一瞬少なからず狼狽するが、すぐに立ち直って前に進み出ると、いつものようにいんぎんにグウェンドリンを迎える。

スプラット師　おお、これは思いがけない喜びです。

グウェンドリン　［ソフィア夫人と握手しながら］こんにちは。

グウェンドリンはスプラット師に両手を預け、スプラット師は会話の間中握っている。

スプラット師　これはこれはようこそ。

グウェンドリン　ウィニーを連れに来ました。

スプラット師　それはがっかりです。あなたはわたしに会いに来るものと思っていました。

グウェンドリン　［ほほえみながら］それは勘ぐり過ぎです。

スプラット師　どうして顔が赤くなっているんですか？
グウェンドリン　どうしてわたしの手を握っているんですか？
スプラット師　わたしの年では全く取るに足らないことです。
グウェンドリン　あなたは今までわたしが知り合った中で一番若い方だと思います。
スプラット師　ああ、どうしてわたしたちは十八世紀に生きていないんでしょうか？　それなら、その心地よい言葉のお礼にわたしはひざまずいてあなたの手にキスするのですが。
ソフィア夫人　彼の言うことは一言だって信じちゃ駄目よ、グウェンドリン。セオドアには女性に対する特別な才能があるんですから。
グウェンドリン　彼にあるのは調子を合わせる才能だわ。
スプラット師　わたしが属している保守派は、素敵な女性を金ぴかの台座にのせてその女性が踏んだ地面を崇拝したんです。
スプラット卿　失礼だが、その女性が金ぴかの台座にのっていたのなら、地面を踏んでいなかったのは確かだ。
スプラット師　あなたには詩心というものがありませんね、トーマス。

スプラット卿はフィッツジェラルド夫人と握手を済ませる。

フィッツジェラルド夫人　行くんですか？
スプラット卿　わたしはホメオパシー（同種療法）の薬を服用している自分の家族の方が好きです。

退場。

グウェンドリン　あなたはコルチェスターの主教になるつもりなのよね？
スプラット師　それはわたしがあれこれ考える話ではありません。前大法官の末息子として、国に言いたいことがあることは隠しません。こういう事柄には、わたしの性格にはふさわしくなくて用いることができないようなたくさんの卑劣な裏工作があったりたくさんの陰の力が働きます。
グウェンドリン　父はすべて決まったと言っています。わたしは父に影響力を行使するように言いました。だから、あなたは酒屋連中を完全に手中に収めたんです。
スプラット師　教会と許可を得た酒屋が協力すれば、悪魔の力が効力を発揮するとは限りません。
グウェンドリン　ウィニーはどこにいるのかしら。
ソフィア夫人　もうすぐ戻って来るわ。ペッカムに行ったの。
スプラット師　［とっさに］どこだって？
ソフィア夫人　レーリングさんが母親と妹に会わせるために連れて行ったのよ。
スプラット師　どうしてわたしに言わなかったんだろうか、ソフィア？
ソフィア夫人　あなたが賛成しないのがよくよく分かっていたからでしょ。
スプラット師　おやっ。

呼び鈴が鳴るよりも先にスプラット師は驚く。続いて、矢継ぎ早に二回目、三回目の呼び鈴が鳴る。

グウェンドリン　何かしら？

スプラット師　玄関に誰かいます。

フィッツジェラルド夫人　明らかにあせっているみたい。

スプラット師は再び国の呼び出しを待っている人間の態度を取る。ドアがさっと空いて、ライオネルが急いで入って来る。今度は、スプラット師は苛立ちを隠すことができない。

スプラット師　何だ、お前か。一体どうして家が火事になったみたいに呼び鈴を鳴らしたのか分からんね。

ライオネル　ねえお父さん、コルチェスターのことを聞きましたか？

スプラット師　何をだって？

一瞬、スプラット師は喜んでいいのか、がっかりする方がいいのか分からない。

ライオネル　ハービンの校長、グレー博士が任命されたと発表されました。

スプラット師　あり得ない。

ライオネル　『ウェストミンスター』に載っています。

スプラット師　『ウェストミンスター』は急進的な新聞で、あれやこれや書くだろう。本当のはずがない。わたしの仲間なら我慢するが、首相がそれほど意地悪で愚かだとは思えない。

グウェンドリン　お気の毒に。

スプラット師　［冷静になって、いんぎんな笑みを浮かべ］いや、お嬢さん、わたしの問題で悩まないでください。

グウェンドリン　やっぱり、ウィニーを待つのはやめます。

スプラット師　ライオネルに車まで送らせます。さようなら、お嬢さん。あなたを見ていると春の日の一筋の日差しみたいでした。

グウェンドリン　さようなら。

グウェンドリンはライオネルに伴われて出て行く。

スプラット師　ソフィア、パトリシア夫人を訪ねてきてくれ。

ソフィア夫人　わたしが？

スプラット師　一体どういうことか、はっきりさせてくれ。わたしには信じられない。とんでもない話だ。

フィッツジェラルド夫人　でも、グレー博士って誰なの？

スプラット師　家柄のよくない人間です。政府が重要な主教の職をグレー程度の能力の人間に与えるほど大馬鹿だとは思えない。能力だって？　あんなのは能力とは言えない。彼はわたしが知り合った中で最も平凡で愚かな人間だ。教区委員より愚かだ。

ソフィア夫人　ねえセオドア、落ち着いてちょうだい。

スプラット師　不愉快なことがしでかされそうなのが分かっているのに、どうして落ち着いていられるんだ？　それに、政府はわたしにそれを支えることを期待する。正しい考えを持った人間がどうしてあんな不道徳で下劣な悪習を支えることができるんだ？

ソフィア夫人　帽子を被りに行くわ。

スプラット師　わたしは自惚れの強い人間でないことを天に感謝するよ。わたしにも欠点はあるかもしれない。誰にでも欠点はあるからな。

ソフィア夫人　［ドアのところで］そうね。

退場。

スプラット師　でも、わたしのことを自惚れ屋だと非難した人間はいなかった。しかし、これは認めよう。わたしがあの責任ある地位に不適当だとは思わない。わたしは公務に関わってきて、ずっと言っておいた方がいいと思っているのは、「わたしは責任と権限に慣れている」ということだ。

フィッツジェラルド夫人　あなたは完全に気が動転しているんじゃないかしら。シェリー酒を一杯飲むのがいいと思いませんか？

スプラット師　ああ、奥方、今は――今はシェリー酒のことなんか考えられません。

フィッツジェラルド夫人　よくなるのに。

スプラット師　わたしは二度とシェリー酒は飲まないと言えるほどです。

フィッツジェラルド夫人　かわいそうな牧師様、とてもお気の毒に思います。

スプラット師　［フィッツジェラルド夫人の手を取りながら］ありがとう、奥方、同情してくれて。あなたはわたしのことを本当に理解してくれていると度々思っていました……。良さを分かってくれない人たちに取り囲まれているのは恐ろしいことです。「預言者が敬われないのはその故郷だけ」と言いますが、それはわたしも経験しています。わたしは冷笑的な笑いと軽薄な下品さに取り囲まれています。ソフィアに反対するようなことは言いたくありません。彼女は最善を尽くすでしょう。でも、彼女にはわたしのような性格を理解するのに必要な繊細な感情がありません。あなたがわたしの妻を知っていればよかったのだが。彼女は優しくて従順で礼儀をわきまえた控え目な天使でした。妻はこうあるべきというもののすべてでした。彼女を取り上げられて、わたしは立ち直れません。

フィッツジェラルド夫人は手を離そうとする。

スプラット師　どうしたんですか？

フィッツジェラルド夫人　何でもないけど、あなたがわたしの手をもう十分なくらい長いこと握っているものだから。

スプラット師　どうして握っちゃいけないんですか？　わたしたちは昔からの友達じゃないですか。

フィッツジェラルド夫人　鼻をかきたいんです。

スプラット師　とてもかわいい鼻だ。

フィッツジェラルド夫人　わたしにそんなことを言うのは本当にいけないことだわ。

スプラット師　こんな時だから、わたしが何を言っても許してください。

フィッツジェラルド夫人　わたしに手の所有権を与えてくれるかしら、それとも、わたしは助けを求めて叫ばなければならないのかしら？

スプラット師　あなたはまるでわたしたちが赤の他人同士みたいに話すけど、わたしたちが初めて会ってから何年経つかは神様がご存じです。

フィッツジェラルド夫人　正にそこよ。わたしたちは二人とも、行儀のいい振る舞い方を心得るだけの年だということは神様がご存じです。

スプラット師　年齢ほど当てにならないものはありません。あなたは十八を一日でも過ぎているようには見えないし、どうにかしても二十二にしか思えません。

フィッツジェラルド夫人　［笑いながら］どうしてそんな馬鹿なことが言えるの？

スプラット師　あなたはわたしが冗談を言っていると思っているが、わたしはごく真面目です。

フィッツジェラルド夫人　それなら、あなたにできる言い訳はないわ。

スプラット師　春が通りでほほえんで鳥が身を震わせてさえずっていても、あなたには何の意味もないんですか？

フィッツジェラルド夫人　ライオネルが聞いたら何て言うと思いますか？

スプラット師　ライオネルは自分のことで手一杯です。わたしは彼をグウェンドリンと一緒に下に行かせました。彼がわたしほどの男なら、彼女が車に行き着く前に結婚を申し込むでしょう。

フィッツジェラルド夫人　かわいそうに、多分ライオネルはどうすればいいか分かっていないわ。

スプラット師　そんなのは簡単なことですから、どうして独身のままでいる男たちがいるのか不思議です。最近の宝石は素敵ですから、女性の指を飾っている美しい指輪を褒めない訳にいきそうもありません。そうなると、当然その女性の手を取ることになります。

スプラット師はフィッツジェラルド夫人の手を取るが、フィッツジェラルド夫人は手を引っ込める。

フィッツジェラルド夫人　あなたが実際に例を示さなくても、おっしゃってる意味は分かります。

スプラット師　あなたはどうしてそんなにわたしに冷たくするんですか？

フィッツジェラルド夫人　あなたがどこまで行くつもりか分かりませんから。
スプラット師　［バスの車掌をまねて］行き先まで参ります、奥方、行き先まで参ります。
フィッツジェラルド夫人　わたしの訪問が明日で終わるのは何て幸運なんでしょう。
スプラット師　永久に――あなたを戻って来る気にさせられる希望がなければ、あなたがこんなに早く行ってしまうと思うと耐えられません。
フィッツジェラルド夫人　聞き違いかしら、それともこれは結婚の申し込みを聞いているのかしら？
スプラット師　結婚の申し込みです。
フィッツジェラルド夫人　わたしが受け入れるといけないから、すぐ引っ込めてちょうだい。
スプラット師　どうしても受け入れていただきたい。
フィッツジェラルド夫人　あなたは今日おかしくなっているに違いないから、今すぐお断りします。
スプラット師　まるでわたしがそんな不真面目な答えを受け入れるみたいだ。
フィッツジェラルド夫人　わたしが今まで知り合った中で、あなたは本当に一番思ってもみなかった人です。一体どうしてわたしと結婚したいの？
スプラット師　鏡をのぞいてごらんなさい、あなた。そうすれば、立派な理由がたくさんあることが分かります。
フィッツジェラルド夫人　それで、あなたのお子さんたちは何て言うと思いますか？
スプラット師　子供たちは自分たちの家庭を築いて、わたしは独りで残されます。
フィッツジェラルド夫人　あなたはソフィアのことを忘れているわ。
スプラット師　ソフィアは頭を剃って修道院に入ればいいんです。
フィッツジェラルド夫人　ソフィアがそれを望むっていうの？

スプラット師が身を乗り出してキスしかけると、フィッツジェラルド夫人は身を引く。

フィッツジェラルド夫人　［驚いたふりをして］何をなさるの？
スプラット師　［ほほえみながら］キスしようとしたんですよ。
フィッツジェラルド夫人　まあ、だって、わたしは受け入れていないわ。
スプラット師　いやとは言わせません。
フィッツジェラルド夫人　そうなると驚くほど結婚の申し込みが意味不明にならざるを得ないわ。
スプラット師　あなたがわたしと結婚すると約束したことをソフィアに知らせます。
フィッツジェラルド夫人　わたしはそんなことはしていないと彼女に知らせます。
スプラット師　どうしてあなたがためらうのか、わたしには想像もつかない。
フィッツジェラルド夫人　わたしが聖職者の妻の責任に耐えられそうだとは思えないもの。
スプラット師　わたしが失礼ながら提供する立場をあなたが立派に果たすと十分確信できるまで、わたしがあえてこの申し込みをしなかったことは信じてもらっていいですよ。

フィッツジェラルド夫人　あなたはわたしの長所を随分買いかぶっているんじゃないかしら、牧師様。

スプラット師　わたしのことをセオドアと呼んでいただけませんか？

フィッツジェラルド夫人　どうしてもできません。随分なれなれしく聞こえるもの。

スプラット師　恐らく、あなたはご自分の部屋に行きたいと思うでしょう。

フィッツジェラルド夫人　どうして？

スプラット師　よく考えるために、あなたはしばらく独りになりたいんじゃないかと思いましてね。

フィッツジェラルド夫人　あなたは随分思いやりがあるのね。

スプラット師　それは、言わせてもらえれば、わたしのせめてもの長所です。

フィッツジェラルド夫人　［つつましく］わたしは隠れ場所の寝室に下がります。

フィッツジェラルド夫人は出て行く。スプラット師はもう一つのドアに向かって歩いて行く。鏡のところを通ると、立ち止まって指を髪に通す。ポケットから小さな櫛を取り出して、銀髪をうまく整える。ズボンがちょっと長すぎるのに気づくと心配そうな表情が顔に浮かぶ。ベストのボタンを外してズボン吊りを上げる。

スプラット師　［強く確信して］何てゲートル向きの脚なんだ。

ウィニーが青ざめて疲れて入って来る。スプラット師はウィニーを見るとちょっと驚いて、ウィニーがだるそうに部屋を横切るのを見守る。ウィニーは椅子にどかりと座って不機嫌そうに手袋をもぎ取り始める。ウィニーが腹を立てていてみじめなことは明白である。

スプラット師　お前は未開地のペッカムから無事に戻ったのか？　あのめったに人が行かない地域で、獰猛な野獣にお前は出くわさなかったと思うが。

ウィニー　［答えはほとんどうめき声である。］全然。

スプラット師は耳をそばだてる。バートラム・レーリングの家族への訪問が全く成功でなかったような感じがしてくる。

スプラット師　［ウィニーを鋭く見つめながら］楽しかったのだといいが。顔色が悪いぞ。

ウィニー　頭痛がするの。

スプラット師　お前はめったに頭痛がすることなんかないのに……。それで、お前の将来の義理の母親は温かく迎えてくれたのか？

ウィニー　とても優しかったわ。

スプラット師　［ごく穏やかに］必ずしも上品とはいえなかったんじゃないのか？

ウィニー　わたしはそんなこと期待してなかったわ。

スプラット師　もちろん、お前にとってはそんなことは何でもないことだろう。本当の公

平さは実に素晴らしいことだが、この世界では、悲しいかな！　実にまれなことだ。ところで、住所はどこなんだ、お前の――お前が一緒に出歩いている青年の。

ウィニー　［反抗的に］ペッカムのグラッドストン街のアスキス住宅よ。

スプラット師　それで、レーリング夫人は、お前が言っていたと思うが、石炭運搬夫の未亡人だったな。

ウィニー　ご主人は石炭船の一等航海士だったのよ。

スプラット師　彼女は海の匂いがするのか、それともペッカム・ライの匂いがするのか？

［急に歌い出す。］（一八九三年頃、Philip Datson 作詞、Edward M. Chesham 作曲、『沖仲仕（*The Longshoreman*）』の一節）

俺は勇敢な船乗りじゃないから
海に出たことがない
海に落ちたら、本当に泳げない
あっと言う間に海の底にいるだろう

なあ、お前は何て口数が少ないんだ。わたしは知りたくてたまらないんだ。ミス・レーリングのことを教えてくれ。下町なまりがあるんだろ？

ウィニー　［泣き崩れんばかりに］ああ、お父さん、よくもそんなことが。

スプラット師　粗野な連中であることは間違いない。でも、お前はそんなことでがっかりしてはいけない。状況をなるべくよくしようとするべきだ。

ウィニー　いいアドバイスをしてくれてありがとう。

スプラット師　見掛けがすべてだということを忘れるな。レーリング家が非常に立派な人たちであることは確かだと思う。確かに、豆をナイフで食べても素晴らしい心を持っているというのはあり得ることだ。お前の彼氏が母親と妹を深く愛していることは想像できる。ああいう種類の連中は決まってそうなんだ。そういう愛情の形は望ましくない関係だ。連中は決まって和気あいあいの家族の良いところを話す。でも、わたしは間違いなくお前が彼らのちょっとおかしな言葉遣いや浅薄で下品な態度にすぐに慣れてしまうと思う。「優しき心は宝冠にまさり、汚れなき信念はノルマン人の血にまさる」（一八四二年、アルフレッド・テニスンの詩“Lady Clara Vere de Vere”の一節）だ。

ウィニー　お父さん、わたしはバートラムと固い約束をしたの。それを破るくらいなら死んだ方がましだわ。

スプラット師は部屋を行ったり来たりする。突然、ウィニーがペッカムから戻った時のウィニーの状態を見てから心に浮かんでいたことをやる決心をする。

スプラット師　なあ、お前とわたしの大きな愛情を隔てるものは何もない。あの若い奴と結婚するとお前の心が決まっているのなら――反対するのはやめよう。

ウィニーは跳び上がってスプラット師を見る。

ウィニー　お父さん！

スプラット師　わたしは、親が子供たちの結婚の選択に影響を及ぼすのは間違いだし悪いことでもあるという結論に至った。子供たちは若くて経験がないから、なおさら自分で判断しかねないのは当然だ。

ウィニーが驚きから立ち直り切れず、まだほんのちょっとうろたえている最中に、ポンソンビーがドアを開ける。

ポンソンビー　ロックスハム卿です。

ロックスハム卿登場。外見的にこれと言った特徴のない青年である。黒髪で小さな口髭があり、鼻眼鏡をかけている。彼をよくよく見る人はいないであろう。少なくともハンサムではないが、立派な服を着て紳士らしい風貌をしている。スプラット師はいつも通り状況を把握し、ロックスハムが入って来ると、心から、しかし非常に急いでいるといった面持ちで近寄って行く。

スプラット師　まあ、あなた、よくお越しくださいました。ちょうどお会いしたかったんです。でもちょっとだけ失礼させてください。聖職者の時間は決して自分のものではないもので、一瞬たりともね。気の毒な女性が下でわたしに会おうと待っているんです。彼女は最初の夫を亡くして、二番目をあちこち探しているんですが、見つからないもので。五分で戻りますから。

ロックスハムが言葉を発する前に、スプラット師は「俺は勇敢な船乗りじゃないから」と陽気に歌いながらさっと出て行く。ウィニーとロックスハムは一瞬顔を見合わせる。

ロックスハム　僕が来たので怒っているんじゃないの、ウィニー？

ウィニー　あら、どうしてわたしが？　わたしたちは長年のお友達よ。わたしたちが二度と会わないなんて馬鹿げてるわ――先日のことがあったからといって。わたしはあなたに会うといつだって嬉しいのよ。

ロックスハム　僕には君の答えが最終的なものだとは思えなかった。

ウィニー　［慌てて］もう、やめて、お願い。

ロックスハム　君にうるさく言って苦しめたくはないけど、僕のことを全く好きじゃないの？　時間が経てば好きになると思わないか？

ウィニー　先日言った通り、あり得ないわ。

ロックスハム　うん、分かっている。でも、あの時は言いたいことが言えなかった。理解

できなかったんだよ。馬鹿みたいに、君は僕を好きだと思っていた。君にのぼせていたから、僕が君にとって全く何でもないなんてことあり得ないと思えた。

ウィニー　どうか、それ以上言わないで。あなたはとても親切でどれだけ感謝したらいいか分からないけど、結婚することはできないわ。

ロックスハム　でも、これだけは言わせてくれ。僕は決してほかの誰かを好きになることはないだろう。万が一、君の気持ちが変わったら、気づくだろう――僕が君を待っていることにね。もちろん、約束や励ましやそういうものは望まないが、いつでも僕を当てにできることを分かってもらいたいだけなんだ。

ウィニー　あなたがそんなに親切だなんて知らなかった。見誤っていたわ。わたしのことを馬鹿だとみなしていると思っていた。ご免なさい。わたしが結婚しないからといってみじめな気持ちにならないで。わたしにはあなたが悩むだけの価値はないわ。

ウィニーが手を差し出すと、ロックスハムはその手を握ってウィニーの目をのぞき込む。

ロックスハム　どうかしたの？

ウィニー　［ほほえもうとして、髪の根元まで赤くなりながら］何が？

ロックスハム　随分――随分、いつもと違うみたいだけど。

ウィニー　ひどい頭痛がするの。本当にそれだけ……。あら、父だわ。

外でスプラット師が陽気に歌っているのが聞こえる。スプラット師が入って来ると、ウィニーはもう一つのドアから素早く部屋を出て行く。スプラット師は精一杯愛想よくロックスハムの方に向かって行く。

スプラット師　お待たせしてなかったらいいのですが。ウィニーはあなたを置いていったんですか？　あの子の行儀というものはどこへ行ったんだ？

ロックスハム　お嬢さんと話しました。わたしには分かりかねます。わたしが入って来た時、泣いていたようです。

スプラット師　女性はみんな、泣くよりましなことがないと泣くものです。それが唯一金のかからない楽しみ方なんですよ。

ロックスハム　わたしは彼女に結婚を申し込みました、スプラット牧師様。

スプラット師　そして、当然、娘は断った。ちゃんとした娘で、申し込まれて最初の三回で受け入れる娘はいませんからね。

ロックスハム　ウィニーはほかの娘たちとは随分違います。

スプラット師　男は誰しも結婚したい娘がほかのみんなとは違うと考える。でも、娘は違いません。女性はすべて似たり寄ったりです。だから、大体においてまあまあの妻や母親になるんです。いや、ねえロックスハム、あなたは完全にわたしの賛成を得ているし、ウィニーが間違いなくあなたを好きだというわたしの保証を得ています。それ以上、何が必要なんですか？　どんどん押しなさい、あな

た、どんどん押すんですよ。女性を扱うのにふさわしいやり方は、時を選ばず求めることです。テリア犬が骨をうるさくせがむようにせがみなさい。結婚すると言い張りなさい。そうすれば、遅かれ早かれイエスと言って、それまでそうしなかったなんて自分はとんでもない馬鹿だったと思うでしょう。

ロックスハム　随分勇気づけられました。

スプラット師　本当ですよ、性的なことを取り扱うのにわたしほど経験豊富な人間はほとんどいないんですから。

ロックスハム　［むしろ悲しげな笑みを浮かべて］あなたの話はまるで普通以上の規模のハーレムを取り扱うのに成功したみたいだ。

スプラット師　実を言うと、そういう経験をしたことはないが、もしその機会があれば、わたしは間違いなくその状況を満足に処理できると思います。

ロックスハム　さようなら。

スプラット師　さようなら。一両日中にまた会いにいらっしゃい。ウィニーの気持ちが変わっていることもあり得ないことではないと思いますよ。さようなら。

ロックスハム　さようなら、どうもありがとう。

二人は握手して、ロックスハム卿は出て行く。スプラット師は上機嫌で両手をこすりながら行ったり来たりする。

スプラット師　［歌いながら］

俺は勇敢な船乗りじゃないから
海に出たことがない
海に落ちたら、本当に泳げない
あっと言う間に海の底にいるだろう

スプラット師は机に向かって座ると、顔に笑みを浮かべて短い手紙を書く。封筒に入れて宛名を書く。

スプラット師　ペッカム、グラッドストン街、アスキス住宅と。

スプラット師がちょうど封筒の封をし終わった時、フィッツジェラルド夫人がしずしずと入って来る。スプラット師は跳び上がって、両手を広げてフィッツジェラルド夫人の方に向かっていく。

スプラット師　あなたは春の日の一筋の日差しみたいに入って来る。

フィッツジェラルド夫人　あなたは今日すでにグウェンドリン・デュラントにもそう言っていたわ。

スプラット師　そうでしたか？　偉大な人間とそうでじゃない人間の違いは、偉大な人間は躊躇せずに同じことを何度も言うということです。

フィッツジェラルド夫人　わたしはあなたの歯の浮くようなプロポーズのことをよく考えてきました、牧師様。

スプラット師　そして、わたしにいい知らせがあるんですね。あなたの目に笑みが浮かんでいるのを見れば分かります。

フィッツジェラルド夫人　あなたは本当に本気なのかしら。

スプラット師　もちろん、本気です、言ったことのどれもこれも、心の底から。わたしが自分の気持ちも分からない子供だとでも？

フィッツジェラルド夫人　あなたはとても惚れっぽい人みたいだし、ご自分の口のうまさに感動することがあるわ。

スプラット師　わたしとしては突然の気まぐれではありません。ああ、たとえ髪の毛がごま塩になっても心の中に愛が芽生えるということが、どうして信じてもらえないんですか？　わたしはあなたを熱愛しているんです。ぜひとも結婚してください。

フィッツジェラルド夫人　そんなことおっしゃらないで。胸がドキドキするわ。

スプラット師　わたしたちの結婚を行う主教が一ダースはいます。わたしたちのハネムーンのめにトムが「ビーチコーム荘」を貸してくれるでしょう。それともイタリアの湖の方がいいですか？

フィッツジェラルド夫人　先を急ぎ過ぎよ。全く、息が切れるわ。

スプラット師　だって、くずくずしてはいられないんですからね。

フィッツジェラルド夫人　それなら、ビジネスライクに話しましょう。

スプラット師　［すごく嫌そうな素振りで］どうしてそんなことしなければいけないんですか？　わたしはお金目当てではありません。話し合わなければいけないような面倒なことがあるふりはやめましょう。そういうことはすべて事務弁護士に任せればいいんです。

フィッツジェラルド夫人　でも、とても重要なことよ。

スプラット師　馬鹿な。わたしが今まで会った中であなたが一番魅力的な女性であること以外、重要なことはありません。あなたを手に入れたなんて、わたしは幸せ者です。わたしたちはこれ以上決して年を取らないでしょう。年ごとに若くなっていくだけです。いつわたしをロンドン一の幸せ者にしてくれますか？

フィッツジェラルド夫人　お願いだから、黙って座って、わたしに一言言わせて。

スプラット師　あなたが日にちを決めてくれるまでは、一瞬たりとも黙りませんよ。

フィッツジェラルド夫人　おやまあ、何ていう人。あなたが自分で日にちを決めればいいわ。

スプラット師　わたしが言った通りです。テリア犬が骨をうるさくせがむようにせがみなさい。どんどん押しなさい、あなた、どんどん押すんです。

フィッツジェラルド夫人　この十分の間にわたしが言おうと無駄な努力をしていたことを聞いてから、あなたが日にちを決めればいいわ。

スプラット師　今から六週間後にしましょうか？　それなら社交シーズンも終わって、空っぽの信者席の一群に説教するのをライオネルに任せても大丈夫ですから。

フィッツジェラルド夫人　お願いだから、わたしに話をさせてちょうだい。

スプラット師　何て頑固な人なんだ！　では、続けて。あなたのどんな小さな気紛れな要求にも、わたしが屈するのを躊躇したなんて言わせませんから。

フィッツジェラルド夫人　わたしが言いたかったのは、わたしには年五千ポンドの収入があるということです。

スプラット師　そういうひどくけちな細かいことには耐えられない。もちろん、それは絶対に終身あなたに与えられるでしょう。ほかに何か言うことがありますか？

フィッツジェラルド夫人　わたしが再婚する日にそれがなくなるということだけ。

突然、スプラット師の顔ががっかりした表情になる。ほんの一瞬の間がある。

スプラット師　全部ですか？

フィッツジェラルド夫人　一銭も。主人は気前のいい人でしたけど、貧乏な後釜を養う気はなかったみたい。

スプラット師はそれでもいいという気持ちを抑えようともがく。息苦しく感じて――突然、部屋がひどくむっとしているように思える。

スプラット師　よかったです。わたし独りであなたを養っていると思えば、あなたはもっとわたしを大事にするでしょう。あなたが――こう言ってはなんですが――わたしに頼っていると思えば、わたしが働く支えになります。

フィッツジェラルド夫人　わたしが一文無しになったら、あなたはわたしの着る物を用意しなければならないし、わたしが地下鉄に乗る時は切符代まで用意しなければならないということが分かっているのかしら？

スプラット師　わたしはそれを人が羨むほど光栄なことだと思うでしょう。

フィッツジェラルド夫人　あなたが愛しているのはわたし自身だけではないんじゃないかとちょっと心配だったけど、あなたの一言一言を聞いてわたしが間違っていたことが分かったわ。

スプラット師　わたしがあなたに結婚を申し込むのにちょっとでも躊躇したとしたら、それはあなたの方が収入が多いことでわたしの純粋な動機が疑われたかもしれないからです。

フィッツジェラルド夫人　あなたは高潔な人格を持っているのね、セオドア。キスしてもいいわよ。

フィッツジェラルド夫人が頬を突き出すと、スプラット師は険しい顔で、心の中に怒り、失望と悔しさを抱えながら義務を果たす。

第二幕終わり

第三幕

場は前幕と同じ。幕が開くと誰もいないが、すぐにスプラット師が入って来る。スプラット師は呼び鈴を鳴らす。ポンソンビー登場

スプラット師　ライオネルは家にいるのか、ポンソンビー？

ポンソンビー　お出掛けです、旦那様。

スプラット師　［ポンソンビーが部屋を出て行こうとすると］客間に来れるかどうか、奥様に聞いてれないか。

ポンソンビー　かしこまりました、旦那様。

退場。間を置いて、ソフィア夫人がフィッツジェラルド夫人と一緒に入って来る。

スプラット師　あなた方の邪魔をしたのでなければいいのだが。

ソフィア夫人　わたしたちはあなたが家にいるかしらと思っていたのよ。

フィッツジェラルド夫人　わたしはあなたにさよならを言いたかったの。あなたに会えないで行ってしまったら、わたしはがっかりしたことでしょう。

スプラット師　わたしたちを置いて行ってしまうつもりですか？

フィッツジェラルド夫人　一時間したら列車が出るんです。

スプラット師　それは随分突然ですね。

フィッツジェラルド夫人　そんなことないわ。ここにいるのは金曜日までとしか言われてないもの。

スプラット師　でも、ぜひ週末にかけて泊まるようにとソフィアがお願いしませんでしたか？

フィッツジェラルド夫人　［ほほえみながら］素直にそうだったとは言えないわ。

ソフィア夫人　［くすくす笑って］あなたの洗濯物は昨日の夜家に戻っているもの、ねえ。

スプラット師　［フィッツジェラルド夫人に向かって］それはあんまりです。そうだった、ソフィア、今日はレーリング夫妻がお茶に来ることをお前に言いたかったんだ。

ソフィア夫人　あなたが婚約に同意したとウィニーが言っていたわ。

スプラット師　［ソフィア夫人をからかいながら］これはお前の思い通りの結婚に違いない。お前はずっとうちの家族を見下す傾向があった。お前は自分の先祖の八百屋の子孫が石炭運びと縁続きになって嬉しいに違いない。全然違うものが一緒になるんだ。

フィッツジェラルド夫人　それで、いつ結婚する予定なんですか？

スプラット師　結婚する予定はありません。

フィッツジェラルド夫人　めまいがしてきたわ。

スプラット師　ウィニーはロックスハム卿と結婚する予定です。

ソフィア夫人　それで、あなたは彼女をほかの人と婚約させるのがそれを成し遂げる最善

の方法だと思っているの？

スプラット師　なあソフィア、お前はこれまでにわたしが間違いを犯すのを見たことがあるかね？

ソフィア夫人　何度もあるわ。仕方がないから言うけど、わたしはあなたが間違いを認めるのを見たことがないわ。

スプラット師　それは同じことだ。典型的なイギリス人のように、わたしは負ける気がしない。

ソフィア夫人　おやまあ、何ていう人なの！　あなたが自分への賛辞をやめなければ、いいお天気ですねと言うことさえできないわ。セオドアお坊ちゃま、自賛は推薦にはなりませんよ。

スプラット師　ソフィアお嬢ちゃま、鼻をかまなければいけませんよ。

ソフィア夫人　［身をこわばらせて］そういうのって、随分下品だと思うわ、セオドア。

フィッツジェラルド夫人　ご自分で説明してください、牧師様。

スプラット師　では、わたしが自慢に思うのは……。

ソフィア夫人　あなたはそれがしょっちゅうね。

スプラット師　わたしが自慢に思うのは、娘の性格を分かっているということです。今は、わたしがどうしても許さなかったら、ウィニーは駆け落ちしてその場であの男と結婚していたと確信しています。でも、わたしはスプラット家の性格を裏の裏まで知っています。わたしたちは特異な性格の家族なんです。

ソフィア夫人　モンモランシー家から受け継いだんだと思うわ。

スプラット師　間違いない。わたしが言う父の頑固さと決断力をお前も覚えているだろ。

ソフィア夫人　豚みたいに頑固だったのを覚えているわ。

スプラット師　なあ、お前を非難したくはないが、本当にそういう不適当なことは言わないように願わざるを得ない。もしお前が自分の父親に払うべき敬意を認めることができないのなら、彼がイギリス大法官だったことを思い出してもらいたい。

ソフィア夫人　わたしにそれを忘れるチャンスをくれたことがあるかしら！

フィッツジェラルド夫人　［ほほえみながら］でも、それがウィニーとどういうはっきりした関係があるの？

スプラット師　わたしの欠点が何であれ、一つの事が正しいとわたしが心を決めたら、どんな力もわたしがそれを実行するのを防ぐことはできないと言おうとしていたんです。そこで、不快なことは言いたくないが、自惚れなしに言わせてもらえば、わたしの非常に特異な性格である頑固さは、我が家のほかの家族の中では心ない連中に強情と言われても仕方がないものに陥りがちだということを悟らざるを得ません。

ソフィア夫人　やれやれ、セオドア、あなたが不快なことは言いたくないと言ったのはさい先がいいわ。

スプラット師　どうか邪魔しないでくれ。今、わたしはあのアイルランド人が市場へ連れて行く豚を扱うようにウィニーを扱っているんだ。彼が自分の行きたくない方向に引っ張ると、実に幸いなことに豚は別の方向に行くんだ。

フィッツジェラルド夫人　今でもわたしは分かっていないみたい。

スプラット師　ウィニーがレーリング氏と結婚するつもりだと言った時、あの子はレーリング氏の母親を当てにしてませんでしたし、レーリング氏の妹も当てにしていませんでした。そういう場合、男はしばしば自分を訓練して資格があると認められるものになってしまいますが、女性には紳士と偽者を見分ける優れた技能を持っていません。女性を見分ける時は別ですが！　ねえ奥方、言っておきますが、ウィニーは彼女たちを全然好きにならないでしょうね。

フィッツジェラルド夫人　彼の親族が不快であればあるほど、ますます自尊心がウィニーに約束を守ることを強いるわ。

スプラット師　いずれ分かるでしょう。

フィッツジェラルド夫人　いろいろな大きな計画みたいに、それについては確実に効果が分かるわ。

ソフィア夫人　あなたはそれが誠実なやり方だと本当に思っているの、セオドア？

スプラット師　なあソフィア、どういうことだ？

ソフィア夫人　わたしにはちょっとうしろぐらい感じがするわ。

スプラット師　なあ、わたしは自分が聖職者であることをお前に思い出してほしくはないが、妙なことにお前はその事実を忘れていることがあるみたいだ。だが、お前に指摘したいのは、少なくとも教会でわたしのような立場にいる人間が不誠実なことやうしろぐらいことをすることはまずないということだ。

ソフィア夫人　［にこっとして］ねえ兄さん、聖グレゴリー教会の教区牧師として、ターカンベリーの聖堂参事会会員として、あなたがキリスト教徒らしく、紳士らしく行動していると断言してくれるんだったら――もちろん、あつかましくこれ以上言わないわ。

スプラット師　心配しなくていい。わたしがすることは何でも正しいと確信してくれていいんだ。

フィッツジェラルド夫人　確かに、あなたは実に素晴らしい方だわ、牧師様。

スプラット師　それは、奥方、気がつかなくもなかった事実です。ところで、ソフィア、トーマスに電話してちょっと寄るように頼んでもらえないか。

ソフィア夫人　ポンソンビーに電話させるわ。

スプラット師　お前がやってくれ、いい子だから。ポンソンビーはぼけかかっているし、特にわたしはトーマスが今日の午後来てくれるのを願っているんだ。

ソフィア夫人　［機嫌よく］面倒な人ね。

ソフィア夫人は出て行く。

スプラット師　わたしはいささかもトーマスに会いたい訳ではありませんが、気の毒だがソフィアに邪魔されないようにするには、あの方法しか思いつかなかったんです。

フィッツジェラルド夫人　どうしてそうしたかったんですか？

スプラット師　あなたと二人だけになるためです。

フィッツジェラルド夫人　お世辞がお上手ね。

スプラット師　随分突然わたしたちのところを去ってしまうから、あなたを叱るんです。あなたはわたしの気持ちなど何も気にかけないんですか？

フィッツジェラルド夫人　だからこそ去って行くんです。

スプラット師　妻になってくれると約束してから、ちっとも二人だけになっていませんよ。

フィッツジェラルド夫人　結婚生活の長い交わりを考えると、わたしは婚約者同士はできるだけ会うべきじゃないと確信しているんです。

スプラット師　あなたはアスコット競馬に行こうと思っていると言っていたと思いますが。

フィッツジェラルド夫人　そのつもりでした。

スプラット師　もちろん、わたしがあなたに説教する権利はありませんが――ちょっと低俗じゃありませんか？

フィッツジェラルド夫人　わたしはちょっと低俗なんです。

スプラット師　つまらない牧師館の女主人になったら、あなたはたくさんの贅沢をやめなければならなくなるんじゃないでしょうか。そうなると、ちょっとアスコット競馬に行くなんてこともなくなるでしょう。

フィッツジェラルド夫人　皮肉で言うんじゃありません。貧しくても楽しい結婚生活があることをわたしは心から信じています。

スプラット師　やってみるまでは信じている人が多いのは知っています。わたしたちは車一台買う余裕がないんじゃないでしょうか。

フィッツジェラルド夫人　車椅子でわたしの希望がすべてかなうと思えてきたわ。

スプラット師　メードなしでやらなければならないと言ったら、わたしのことをひどいと思いますか？

フィッツジェラルド夫人　自分のストッキングを繕うのは、きっとすごく楽しいでしょうね。

スプラット師　教区の世話をするのは好きですか？

フィッツジェラルド夫人　他人のことに干渉するのは大好きです。そして、それにむきになって腹を立てないのは貧しい人たちだけです。

スプラット師　［率直さを見せて］あなたはわたしが欠点だらけだと思っているのかどうか分かりません。

フィッツジェラルド夫人　あなたに欠点がなかったら、つまらないわ。

スプラット師　あなたはわたしが短気で厳格で、気難しくて横柄だと思うようになるでしょう。わたしはあなたが手遅れになる前に最悪のことを知ってくれることを願っています。

フィッツジェラルド夫人　言ってくださってよかったわ。もうためらわずに打ち明けられる。わたしは喧嘩っ早くて自惚れ屋で、浪費家で嘘つきなの。

スプラット師　お互いの信頼は幸せな結婚の最善の基本だと言います。

フィッツジェラルド夫人　わたしたちの結婚生活はちょっとした出来事に事欠かないと思うわ。

スプラット師　［考え深げに］知り合いの男性がちょっと前に話してくれたんですが、自分の婚約が『モーニング・ポスト』で発表されたのを見た時ほどうろたえた瞬間はなかったそうです。

フィッツジェラルド夫人　わたしの知り合いの女性は、自分の婚約を読んだ時、「ターポン（大西洋産の大魚）とは正にこのことよ」って叫んだわ。

スプラット師　彼女が何を言っているのか分かりませんが。

フィッツジェラルド夫人　相手は捕まえるのが難しい魚だったけど、とうとう釣り上げたって言っているのよ。

スプラット師　［こわばって］あなたのお友達はあまりいい人だったはずがないと思います。

フィッツジェラルド夫人　彼女は未亡人で、あなたが知りたいのももっともだけど、彼らはいつも危なくて……。わたしたちが婚約したことはソフィアに話したの？

スプラット師　いいえ、まだです。

フィッツジェラルド夫人　まあ！

スプラット師　しばらくの間内緒にした方が面白いと思いましてね。

フィッツジェラルド夫人　あなたには鋭いユーモア感覚があるのね。

スプラット師　もちろん、あなたがお望みなら、すぐにでも屋根の上からそれを叫びますよ。

フィッツジェラルド夫人　それは見苦しいし、しかも危ないわ。

スプラット師　いいですか、わたしたちの結婚の日にちが未定なのは仕方がないんです。

フィッツジェラルド夫人　そうなの？

スプラット師　［打開策を探りながら］わたしたちはあの問題を検討していませんよね？

フィッツジェラルド夫人　確かに、あなたはわたしに六週間で準備できるか聞いたわ。

スプラット師　忘れていたなんて、わたしは何て馬鹿なんだ！　もちろん、聞きました。わたしは記憶力が悪くて、実はちょうどその時にわたしは主教になるんです。

フィッツジェラルド夫人　でも、もちろん、わたしがあなたの魅力に屈したい気持ちを少しでも見せたら、見苦しいわね。アマリリス（田園詩の羊飼いの少女）は内気な性格を見せるのがごく当然ですもの。

スプラット師　その一方、コリュドーン（古典の牧歌の羊飼いの若者）は熱烈で、遅らすことに同意しないでしょう。

フィッツジェラルド夫人　当時の世の中がさかさまだったのか、今の世の中がさかさまなのか分からないわ。

スプラット師　包み隠さず率直に言いましょう。わたしはあなたに隠すつもりはありません。あなたが昨日あの話題についてわたしに言ったことは――わたしにとってはすごく嫌なことなんです。

フィッツジェラルド夫人　主人の遺言のことかしら？

スプラット師　その通りです……。その遺言のせいでこの問題が違うものになってしまいました。それを否定するのは偽善的というものでしょう。わたしの気持ちはそうじゃありませんよ、もちろん。

フィッツジェラルド夫人　あなたのことはよく分かっているから、そんなことは疑わないわ。

スプラット師　あなたが貧乏になっても、わたしの愛がより強くなるだけです。

フィッツジェラルド夫人　ねえ、セオドア、わたしはお金がなくなるのが嬉しいくらい。

あなたと――限られた数の商人以外の人に頼るものがなくなると思うと嬉しいのよ。もうすべて即金で払ってしまっていたらよかったわ。

スプラット師　つけが多くないといいんですが。

フィッツジェラルド夫人　あら、多くても六、七百ポンドよ。

スプラット師　わたしが言おうとしていることが誤解を招きやすいことはよく分かっています。でも、あなたがどんなに思いやりのある人かも分かっています。わたしが最初にあなたに魅力を感じたのはそこなんですから。あなたはわたしのことを理解してくれると信じています。あなたに金目当てだと思われるくらいなら、わたしはどんなことでもします。

フィッツジェラルド夫人　立派な動機がない限り、あなたは何も言わないとわたしは確信しています。

スプラット師　昨日、わたしはあなたにできるだけ早く結婚してほしいと言いました。今日になって待ってほしいと言ったら、随分変だと思いますか？

フィッツジェラルド夫人　とても賢明だと思うわ。

スプラット師　何といっても、あなたのことを第一に考えなければいけませんからね。

フィッツジェラルド夫人　［真面目に］あなたの言うことに、自分への思いやりなんかないことはよく分かっています。

スプラット師　わたしと一緒に貧乏に直面することをあなたにお願いする訳にはいきません。あなたはそういうことにあまりにも慣れていません。わたしは自分を説得しようとしましたが、無理です。もしわたしが自分の気持ちに負けるとしたら、それはまったくわたしのわがままというものでしょう。

フィッツジェラルド夫人　あなたはとても思いやりのある方だと思います。

スプラット師　恐らく、わたしの収入が多くないのはご存じでしょう。

フィッツジェラルド夫人　それは聖職者名簿で調べました。

スプラット師　ウィニーの嫁入り道具に大金を使わなければならなくなるでしょう。わたしにはライオネルがグウェンドリン・デュラントとうまくいくだろうという十分な確信があります。彼女が六万ポンド持っているのは本当ですが、常識的にも何らかの手当てをしなければなりません。

フィッツジェラルド夫人　かなり多くの出費があるのは確かね。

スプラット師　一、二年の内にそういったことがすべて起きます。もちろん、見かけ倒しの校長にコルチェスターが与えられましたが、何といっても、一人以外の主教は非常に年寄りでよろよろしています。わたしは本部に対して大きな影響力を持っています。

フィッツジェラルド夫人　すでにあなたはどこをとっても主教に見えるわ。

スプラット師　多くを望んでいるのは分かっていますが、一、二年待ってもらっても大した問題じゃないでしょうか？

フィッツジェラルド夫人　あなたは婚約に縛られない方がいいとは思わないの？

スプラット師　思っていたほどあなたが裕福でないからといってわたしが予定された結婚をやめられると思えるほど、あなたはわたしのことを悪く思っていないのは確かですよね？

フィッツジェラルド夫人　ねえ、愛には二種類あると思ったことがあるかしら？　一つはスイートピー（花）みたいな愛よ。若い人が若い人とお互いに恋に落ちると気が変になって、結婚して子供を十七人持ってずっとみじめな生活を送るんだわ。そして、もう一つはイーティングピー（食用のエンドウ豆）みたいな愛よ。財産がないこともない育ちのよい人がまずまずの暮らし向きの育ちのよい人と恋に落ちるのよ。彼の情熱は全く誠実なものだけど、もし女性に結婚を不便なものにしないだけの大きな収入がなかったら、差し支えない範囲で愛を抑えるのは難しくないんだわ。スイートピーはとても喜ばしくてわたしたちはみんな称賛するけど、イーティングピーは実際的かつ持続可能なのよ。

スプラット師　あなたの「みたいな」という例えのお陰でわたしは決意を変えないでいられます。

フィッツジェラルド夫人　あなたは若いから二年や三年は何の違いもないでしょうけど、わたしは三年で今より少なくとも五歳は老けるということを忘れないでちょうだい。それは女性参政権が改善することのできない不公平な宿命の一つじゃないかしら。

スプラット師　ねえあなた、わたしはあなたの一時的な肉体的魅力に惹かれているのではなくて、むしろあなたの永続的な心の特質に惹かれているんです。

フィッツジェラルド夫人　そんなこと言わないで。そんなのは男が決まって全く不器量な女を慰めようとする言い方だわ。

スプラット師　わたしがあなたの肉体的な魅力を考慮に入れるべきだということをもっとも否定しそうもないのは当然です。

フィッツジェラルド夫人　［ちょこんとお辞儀して］ありがとう、**牧師様**。

一瞬の間があり、その間にスプラット師は決めかねて迷う。フィッツジェラルド夫人は顔は真剣だが目を明るく輝かせながらスプラット師を見つめる。

フィッツジェラルド夫人　先日あなたが必ずしも本気じゃないことをわたしの貝殻のような耳にいろいろつぶやいたことは忘れましょうか？

スプラット師　わたしが言ったことを取り消させてほしいと言ったら、わたしは見下げ果てた人間になるでしょう。

フィッツジェラルド夫人　あなたの将来のことを考えたら、それは犠牲ではありません。わたしにはもう形の良いふくらはぎが主教のゲートルに包まれているのが見えます。

スプラット師　あなたはわたしのことを一生軽蔑するでしょうね。もしわたしが――あなたの提案を受け入れたら。

フィッツジェラルド夫人はスプラット師をちらっと見て、彼の困惑ぶりを楽しんでいる。しまいにくすくす笑いをこらえきれなくなる。

フィッツジェラルド夫人　ねえあなた、わたしにあなたと結婚する気があったなんて、いささかなりとも思っているの？

スプラット師　［びっくり仰天して］何ですって？

フィッツジェラルド夫人　何があったってそんな気にならないわ。もしわたしがあなたを二十四時間そう思うようにさせたのだとしたら、それは単なるいたずら心からよ。

スプラット師　ずっとわたしをからかっていたと言うんですか？

フィッツジェラルド夫人　むしろあなたのことは好きでした。それに、結婚を申し込まれるのはいつだって素敵なことですもの。

スプラット師　たった今、あなたは二種類の愛をスイートピーとイーティングピーに例えました。失礼だと思われたくありませんが、あなたの感極まり方を見て、わたしはまず第一にベニバナインゲンを思い出しました。

フィッツジェラルド夫人　そのことは全部忘れましょう。あなたは完全に自由だし、あなたがわたしと結婚する必要は全くありません。わたしたちは友達でいましょう。あなたは友達としては素敵だけど、夫にしたら全くうんざりするでしょうから。それに、もう未亡人とは恋をもてあそばないことね。未亡人は恐ろしく危険だから。さようなら、すごく楽しかったわ。

スプラット師　［ぎこちなく会釈しながら］そう言ってくれてよかったです。

フィッツジェラルド夫人は出て行く。スプラット師はほっとして深く息を吸う。不様な十五分だったが、もう終わって、自由なのだ。ドアが開いてウィニーが入って来る。

スプラット師　お前か。一体どうなったのかと思っていたんだ。

ウィニー　バートラムに手紙を出して、あなたがわたしたちの婚約に同意したことを知らせたわ。

スプラット師　彼は喜びの絶頂に違いない。

ウィニー　彼からの手紙を受け取ったところよ。彼がやって来るわ。

スプラット師　お前が幸せそうなのを見て嬉しいよ。［このセリフを言っている時にソフィア夫人が入って来て、彼女の方を向く。］うちの子たちは、ソフィア、しばしばひどく厄介だが、呑気に構えるしかないな。たまに大きな自己満足を与えてくれる。

ウィニー　ソフィア叔母さんはあまり喜んでいないんじゃないかしら。

ソフィア夫人　ねえ、あなたが彼を愛していてお父さんが賛成なら、わたしはもう言うことはないわ。彼は下院議員になるでしょうし、恐らく社会主義者だというのも悪いことではないんでしょう。わたしたちに味方する賢い青年が望まれるんじゃなくて、裕福なことが望まれるんです。

スプラット師　恐らく、わたしたちは何とか彼を手に入れることができるだろう。

ソフィア夫人　あなたが急進党員か保守党員かは問題じゃないみたい。手に入る仕事がある時に、あなたはそれを手に入れるんだから。

ポンソンビー登場。バートラム・レーリングが続く。

ポンソンビー　レーリング様です。

スプラット師　あなたの話をしていたところだ。

レーリング　わたしがどんなに感謝しているか知っていただきたくて……。

スプラット師　［遮って］何も言わんでいい。

レーリング　もっと早くお話ししたかったんですが、ウィニーが許してくれなくて。

スプラット師　終わりよければすべてよしですよ。ソフィア、お前に話があるんだ。ちょっと隣の部屋へ来てくれないか？

スプラット師とソフィア夫人は奥の客間に入って行く。バートラムは両手を差し出す。

レーリング　それで？

ウィニー　それで？

レーリング　何て分別のある人なんだ、君のお父さんは。

レーリングはウィニーを引き寄せるが、ウィニーはわずかに抵抗する。

ウィニー　気をつけて。

レーリング　お父さんがソフィアを連れて行ったのはどうしてだと思う？

ウィニー　あの二人はわたしが思っていたほどあわてていないみたいだわ。

レーリング　僕はすごく幸せだ。座って。

二人がそれぞれに座ると、レーリングはウィニーの腰に腕を回す。ウィニーは身を引く。

ウィニー　お願いだからやめて。

レーリング　［驚いて］一体どうして？

ウィニー　誰かが入って来たら、馬鹿みたいだわ。

レーリング　でも、婚約しているんだから何が問題なの？　だって、妹のルイーズが婚約していた時、うちではよく二人のために居間を出て行ったものだし、誰かが入らなければならない時は、ドアに古いガラガラをつけておいたよ。

ウィニー　あなたの妹さんは結婚してなかったわよね？

レーリング　うん、そう、婚約を解消したんだ。彼は必ずしも彼女の基準に達していなかった。彼女は進歩的な急進党員で社会福祉事業の指導員だからね。だけど、彼はむしろ普通の若者だった。事務弁護士のところの事務員だ。ルイーズはとても頭がいいけど、彼は芸術が何のことか少しも分からなかった。確かに笑わせ

てくれると思わなければ、芝居を観に行こうとしなかった。

ウィニー　わたし自身は芝居を観て楽しむ方が好きよ。

レーリング　いや、うちではそれをやめさせるだろうね。芝居は楽しませることよりも崇高なことのためにあるんだ。

ウィニー　バートラム、教えてほしいんだけど、あなたの袖口は外せるの？

レーリング　一体どうしてそんなこと聞くの？

ウィニー　気になってたの。

レーリング　実を言うと、そうなんだ。実にいい思いつきだよ。［袖を押し上げると、仕組みを見せて説明する。］いいかい、袖口がボタンで留まっていて、袖口をちょっと回すと――汚れているのは端っこだけで――洗濯したてのワイシャツを着ているみたいに見える。何度も洗濯しなくて済むんだ。

ウィニー　男の人は毎日洗濯したてのワイシャツを着るものだと思ってたわ。

レーリング　袖口のためでしかないね。

ウィニー　トム伯父さんの仕立屋を紹介してもらうといいわ。きっと喜ぶわ。

レーリング　どうして、僕が着ている服のどこがいけないの？

ウィニー　とても素敵だけど、トム伯父さんの服ほど素敵じゃないと思う。

レーリング　彼はサヴィルロー（ロンドンの一流の紳士服の仕立屋の多い通り）の誰かのところに行っているんだと思う。僕にはそんな余裕はないよ。

ウィニー　でも、払う必要はないでしょ。トム伯父さんは仕立屋に払わないもの。男の人はそうだわ。

レーリング　でも、僕は今まで一ペニーだって借りたことはない。それは母が最初から僕に教えたことだ。「現金払いでやっていきなさい」と言われて、それは僕が学んだことの中で最もいいことの一つだ。このスーツはシティーで現金払いで買った。

ウィニー　でも、既製服を着て結婚はできないわ、バートラム。

レーリング　驚いた、どうして？　僕は今着ているこのスーツを着て結婚するつもりだ。君がお望みなら、洗濯したてのワイシャツは着るけど。

ウィニー　ソフィア叔母さんは、わたしたちが結婚したら、あなたは恐らく下院議員になるだろうと言っていたわ。

レーリング　次の選挙で労働党の議席を提案されている。今回は当選確実な議席だ。

ウィニー　［ためらいがちに］パパはあなたを出世させてやれるだろうと言っているわ。

レーリング　どういうこと？

ウィニー　仕事は必ずあるわよね。パパは政府に大きな影響力があるの。

レーリング　ねえ、僕のことを何だと思ってるの？

ウィニー　でも、あなたは成功したくないの？　一生みすぼらしい物書きで満足するつもりじゃないわよね？

レーリング　［ウィニーの側にひざまずきながら］ああ、君、分からないの？　僕は取るに足らない人間だ。僕は単なる道具だけど、道具であることを誇りに思っている。僕が貧乏だろうと裕福だろうと、それがどうだというんだ？［ウィニーの両手を取って、極端に愛撫するような声になる。］数年は仲間のために働きたい。

君に僕と一緒に働いてもらいたい。君に安楽は提供しない。提供するのは貧苦と疲労、毎日繰り返す疲労だ。君に我々のこの恐ろしい文明の悲惨さを知ってもらいたい。不公平さと冷酷さを。君は僕が出世したいかどうかを問うている。でも、僕は失業者のあの長い行列のことを考えている。そして僕には彼らの目に恐怖、寒さと空腹で絶望的な恐ろしい明日に対する恐怖が見える。冬の夜ずっと巡査が堤防を行ったり来たりして、気の毒なホームレスたちが凍死するといけないから寝かせないようにするのを君は知ってるかい？

ウィニー　もう、やめて、やめてちょうだい。

レーリング　貧乏人や浮浪者やつまはじき者の味方だったナザレ人（キリスト）のことを君は考えることがあるだろうか。時々、簡易宿泊所で失業中の大工に会うと、不思議なことに……煉瓦箱を運ぶ煉瓦職人の目を通して神が僕を見ていると思えたり、通りを掃除する掃除夫の謙虚さを通して神が僕に話しかけていると思えたりするんだ。

ウィニー　わたしが随分卑劣な人間みたいに思えるわ。

レーリング　そんなふうに思わせたい訳じゃないんだ。

ウイニー　わたしはとても恥ずかしいわ。ああ、わたしがもっとあなたにふさわしくなれるように教えてちょうだい、バートラム

ウィニーがかがむと、レーリングは唇にキスする。その時、スプラット師が歌うのが聞こえる。

俺は勇敢な船乗りじゃないから
海に出たことがない

スプラット師が嬉しそうに入って来る。

スプラット師　伯父さんが着いたところだ、ウィニー。

ポンソンビーが入って来てスプラット卿の来訪を告げ、すぐにスプラット卿が続く。

ポンソンビー　スプラット卿です。

退場。

スプラット卿　こんにちは。

スプラット師　レーリングさんは覚えていますよね？

スプラット卿　［レーリングと握手しながら］あなたを祝福しなければいけないと聞いています。

レーリング　どうもありがとう。

スプラット師　ソフィアはすぐ下りてくるでしょう。これは家族の集まりだからあなたを招待したんですよ、トム。

スプラット卿　ええっ！

スプラット師　どうしてあなたがそんなふうに言わなければならないのか分かりません。これ以上素敵なこと、これ以上素晴らしいこと、これ以上楽しいことは何も想像できないというのに。

スプラット卿　ずっとお前は想像力豊かな奴だと思っていた。

ウィニー　ほかに誰か来ないの、パパ？

スプラット師　わたしはお前の将来の親族にもできるだけ誠意を尽くすのが義務だと思っているんだ、ウィニー。娘さんを今日お茶に連れて来るようレーリング夫人に頼んでおいた。

わずかに困惑の間がある。

レーリング　母には随分世話になっています、スプラット牧師様。わたしが子供の頃に父が死んで、わたしが何もしないで済んだのは、もっぱら彼女の意志の強さと正に重労働のお陰です。

スプラット師　わたしは彼女と知り合いになりたい。

ソフィア夫人登場。

ソフィア夫人　フィッツジェラルド夫人を無事この家から見送ってきたところよ。[スプラット卿に向かって]あなたにさようならを言ってほしいって。

スプラット卿　素敵な女性だ。

スプラット師　魅力的な女性です。ちょっと世俗的かもしれないが、魅力的な女性です。

ポンソンビーが入って来る。

ポンソンビー　レーリング夫人とミス・レーリングです。

レーリング夫人は背が低くてでっぷりとしており、赤ら顔で白髪をかなりきつく引きつめている。粗末なクレープの喪章を巻いたボンネットをちょっと傾けて被り、黒い流行遅れのマントを着て、木綿の手袋をはめている。黒っぽい男物の傘を持っている。ルイーズ・レーリングは鼻眼鏡をかけている。断固とした若い女性。すぐ腹を立てるだけでなく、積極的に腹を立てる対象を捜している。

スプラット師　[心をこめて二人の方に向かって行きながら]初めまして。こんにちは、レーリング夫人。

レーリング夫人　ご親切に、ありがとう。

スプラット師　［ルイーズに向かって］こんにちは。
ルイーズ　どうも、ありがとう。まあ、バートラム。
レーリング　やあ、ルイーズ。
レーリング夫人　今日の午後あたしたちに会えるとは思ってなかったでしょ、バーティー。
ソフィア夫人　座りませんか？　すぐにお茶が来ます。
スプラット師　わたしの妹に紹介させてください、これはソフィア・スプラット夫人です……。ミス・レーリング、これはわたしの妹です。
ルイーズ　正しくはミス・ルイーズ・レーリングなのよ。
レーリング夫人　あたしには娘がいるんですよ、**牧師様**。でも、年上の方のフローリーは頭が完全に正常という訳じゃありませんで、精神病院に閉じ込めるしかなかったんです。
レーリング　事故のせいなんです。
スプラット師　実に悲しい。実に悲しい。来ていただけたのは実に運がよかった。ちょうど一年の今頃はたくさん予定がありますからね。
ルイーズ　あなた方ウェストエンドの人たちは何もしないのかと思ってたわ。
スプラット師　［ほほえみながら］ウェストエンドはペッカム・ライで評判が悪いですね。
ルイーズ　でも、ペッカム・ライの人たちが特別いいとも言えないと思うわ。
レーリング　彼らには公共心というものがないんだ。
ルイーズ　それでも、あたしたちはできるだけのことはやっているわ。あたしたちの組合は彼らに活を入れようとしている。毎週会合を開くけど、彼らは来ようとしないのよ。
ソフィア夫人　それは不思議ね。
スプラット師　それで、あなたにもお兄さんと同じ演説の才能があるんですか？
ルイーズ　いえ、あたしは時々二言三言言うだけだわ。
レーリング夫人　あんたもこの子が話すのを聞くといいわ。
レーリング　ルイーズは南ロンドンで最も演説のうまい人間の一人です。
ルイーズ　それで、わたしは何にでも参加する女性を支持するわ。家にいて小説を読んだり舞踏会に行くこと以外何もしないような女性には我慢ならないの。女性の活躍の場は限りなくあるんだから。
レーリング　限りなくね。
ルイーズ　それに、今時女性が男性より劣っているなんて誰が思うの？
レーリング夫人　この子は驚くべき人間じゃないこと？
ルイーズ　［いさめながら］ママったら。
レーリング夫人　わたしがいつも人前で褒めるって言うの。でも、仕方がないわ。この子がもらったいろいろな賞や免状を見るといいわ。そう、わたしはこの子が自慢なのよ。
ルイーズ　ママ、いつもそんなふうに言うのはやめて。あたしが子供だと思われるわ。
レーリング夫人　ても、ルイーズ、仕方がないよ。お前は驚くべき人間で、それは誰も否定しない。皆さんにお前が取った金のメダルのことを話しておやりよ。
スプラット卿　そうしてもらえるといいですね。わたしはいつも金のメダルを持っている

人を尊敬しているんです。

ルイーズ　［ほほえみながら］冗談でしょ。

レーリング夫人　まあ、ルイーズ、お前も頑固だね。この子はずっとこうなの――子供の頃からね。

ポンソンビーが茶器を持って入って来る。レーリング夫人は部屋を見回し、スプラット師は彼女の目が初代スプラット卿の肖像画に向けられているのを見る。

スプラット師　あれは前イギリス大法官だったわたしの父です。

レーリング夫人　とても立派な額縁だわ。

スプラット卿　［馬鹿笑いして］あれは醜男ですよね？

レーリング夫人　あら、そんなことないわ。そんな失礼なこと言わないわ。

スプラット卿　まあ、正直言って美男子だったとは言えません。

スプラット師　トーマス、わたしの父だということを忘れないでください。

レーリング夫人　今見てみても、やっぱりそんなに醜男じゃないと思うわ。

スプラット卿　我が家では、弟のセオドアによく似ていると思っています。

レーリング夫人　確かに、そう言われてみると、似ているみたい。

スプラット師　兄は実にユーモアのある人なんです。

スプラット師がレーリング夫人に紅茶を一杯渡すと、レーリング夫人は何かを考えながらかき混ぜる。

レーリング夫人　［ソフィア夫人に向かって］素敵な所ね、ここは。

ソフィア夫人　サウスケンジントンがですか？　いろいろな郊外の中で最も不快でない所ですね。

スプラット師　なあ、サウスケンジントンを郊外と言うのは許せない。ロンドンのど真ん中だぞ。

ソフィア夫人　ロンドンはいつも低俗なことなく面白かったハムレットを思い出させるわ。サウスケンジントンは面白くないベイズウォーターよ。

レーリング夫人　ペッカムは素敵な所よ。あそこの人たちはとても親切なの。

ソフィア夫人　そうでしょうね。

レーリング夫人　あたしたちはグラッドストン街にとてもかわいい小さな家を持っています。電灯と電話と、そう、素敵な浴室があるわ。あたしたちが越して行った時、ルイがあたしに言ったのよ。「ママ、土曜日まで待てないわ。今晩お風呂に入る」って。バーティーは毎朝入るんです。

スプラット師　そうなんですか？

レーリング夫人　ええ、あの子はそうしないのは無理だって言うんです。お風呂に入らないと、あの子は一日中気持ちよくないんです。

レーリング　お母さん。

レーリング夫人　あたしが子供だった頃とは事情が違います。だって、あの頃はお風呂に入ることなんて考えている人はいなかったもの。ところで、つい先日大工のスミザースさんと話したの。誰のことか分かるわよね、バーティー？

レーリング　ええ、お母さん。

レーリング夫人　彼があたしに言ったわ。「よお、レーリングの奥さん、みんな小うるさくなっちまって、浴室のない家なんか建てた日にゃ、見向きもしない」って。

スプラット師　「きれい好きは敬神に次ぐ美徳」と言いますからね。

レーリング夫人　それは否定しないけど、用心しなきゃいけないわ。具合があまりよくないのにお風呂に入って風邪を引いて死んだ人をたくさん知ってるもの。

スプラット卿はルイーズ・レーリングにお茶を一杯与え、砂糖を手渡す。

ルイーズ　ありがとう。お砂糖は結構。あたしは炭化水素は信じないの。

スプラット卿　何ですって？

レーリング夫人　構わないでやってくださいな、**牧師様**。この子のこだわりの一つなんです。こだわることだらけなんです、バーティーとルイは。そのせいであたしはかんしゃくを起こしそうになることがあるんだから。

ルイーズ　ママ、口の利き方に気をつけてちょうだい。

レーリング夫人　それなら、お前だって、ルイ――ルイーズのことです。この子はあたしにルイって呼ばれるのが好きじゃなくて。品がないって言うんです。ねえ、**牧師様**、うちの子たちの洗礼名はバートラムとルイーズなんです。でも、ずっとバーティー、ルイって呼んできたから、もうその習慣から抜けられないんです。でもねえ、子供たちが大人になって世間で成功すると、全部ひっくり返したがるんです。今、バーティーがあたしにしてほしいことは何だと思いますか？

スプラット師　想像もつきませんね。

レーリング夫人　それは、信じられますか、あたしに禁酒の誓いをしてほしいんです。

レーリング　お母さん。

レーリング夫人　でも、いいですか、**牧師様**、あたしが言いたいのは、あたしは働き者で、あたしのやる仕事が何であれ、時々はビールがほんの一滴ほしいんです。船長は――うちの亭主のことです――ほんのちょっとしか貯めてなかったから、未亡人になった時、あたしは生活のために働かなきゃならなかったのよ。そうして、子供たちには完全な立派な教育を与えたんだわ。

スプラット師　あなたが子供たちを自慢するのも当然です。うちの娘はミス・ルイーズの半分の知識も持っていないでしょう。

ルイーズ　それはあなたの失敗です。あなた以外の誰のせいでもないわ。あなたが彼女に適切な教育をしなかったからです。女子が男子と同じように教育を受けちゃいけないと思える理由はないわ。わたしはずっとそれを言ってきたし、これからもずっとそうするわ。

レーリング夫人　この子は素晴らしいでしょ？　あたしはこの子が話すのを何時間でも続けて聞いていられるわ。

スプラット師　絶対禁酒主義の話以外ならでしょ？
レーリング夫人　［大笑いして］あんたの言う通りよ、**牧師様**。あたしが言いたいのは、あたしは働き者で……。
スプラット師　それで、ビールがほんの一滴ほしい。分かりました、分かりました……。先日、光栄にもうちの教会を掃除してくれている女性とその問題を話し合いましたが、彼女も同じような意見でした。でも、彼女は蒸留酒の方が好きだと言っていましたよ。
レーリング夫人　あら、あたしは絶対に蒸留酒は飲まないわ。
スプラット師　どういう絶対にですか？
レーリング夫人　［にこにこ顔で］まあ、めったによ。
スプラット師　素晴らしい！　素晴らしい！
レーリング夫人　もう笑わないでよ。実を言うと、時々お茶に入れてほんの一滴飲んでるの。
スプラット師　おや、どうして言ってくれなかったんですか？　ウィニー、本当はお前がわたしに言っておいてくれるべきだったんだ……。呼び鈴を鳴らしてくれないか？
レーリング夫人　あら、そんなつもりじゃなかったのに、**牧師様**。
スプラット師　ねえ奥さん、あなたが飲むのは何ですか？　ラム酒ですか？
レーリング夫人　［顔をしかめながら］もう、勘弁して。
スプラット師　ウイスキーですか？
レーリング夫人　いえ、**牧師様**、お金をもらってもそれは飲まないわ。
スプラット師　ジンですか？
レーリング夫人　［満面の笑みを浮かべて］「ホワイト・サテン」と呼んで、**牧師様**。
スプラット師　「ホワイト・サテン」ですって？
レーリング夫人　今は笑えるけど、ラム酒はあたしに合わなかった。体にはいいんだけどね。
スプラット師　間違いない。
レーリング夫人　最後にほんの一滴飲んだ時――あたしは酔った。今は、友達のクーパー夫人はほかのものは飲めないわ。
スプラット師　おやおや、それは随分変ですね。
レーリング夫人　あんたはクーパー夫人を知らないわよね？　彼女はとても素敵な女性よ。シェパード・ブッシュにとてもかわいい小さな家を持っている。
スプラット師　健康的な所ですね。
レーリング夫人　ええ、そう、地下鉄が大きな影響を与えた。あんたもクーパー夫人と知り合いになるといいわ。彼女は素敵な女性で完璧なレディーよ。誰にしろ、彼女を悪く言う人はいないわ。
ルイーズ　ママ。
レーリング夫人　彼女は時々ほんの一滴を飲みすぎるって言われてる。でも、正体をなくしてしまうほど飲むのは見たことがないわ。
スプラット師　ほう！

レーリング夫人　そりゃ、あたしは正体をなくすほど飲むのは賛成じゃないわ。あたしのモットーはきちんと節制することよ。でも、つい先日クーパー夫人があたしに言っていた通りよ。彼女は「レーリング夫人、あたしが経験してきたいろんな苦労について、同じレディー同士として話すと、ほんの一滴のラム酒がなかったらどうなっていたか分からない」って言ってたわ。彼女は大変な苦労をしてきたんだわ。それは否定しない。

スプラット師　かわいそうに、かわいそうに！

レーリング夫人　そう、大変な苦労をしてきたのよ。でも、人は何て違うのか、おかしなものね。クーパー夫人があたしに言ったの。「レーリング夫人、誓ってあたしは「ホワイト・サテン」は飲まないわ。自分が逆立ちしてるのか、かかとで立っているのかわからなくなるから」って。だからあたしは言ってやったの。「クーパー夫人、それは飲まない方がいいわ」って。あたし、間違ってたかしら、**牧師様**？

スプラット師　いや、完璧です！　あなたはこれ以上ないくらいしっかりした忠告をしたと思います。

ポンソンビー登場。

スプラット師　ポンソンビー、あるかな――この家に「ホワイト・サテン」は？

レーリング夫人　「サティネット」って言うのを聞いたことがあるわ。

ポンソンビーの魚のような目がゆっくりとスプラット師から太った女性に移り、黒い喪章を巻いたボンネットのふちのしゃれた上ぞりを見つけると、驚いて目をぱちくりする。

ポンソンビー　「ホワイト・サテン」ですか、旦那様？　聞いてみます。

スプラット師　［冷静に］さもなければ、「サティネット」は？

ポンソンビーは困惑した様子でスプラット師を見る。

スプラット師　ポンソンビーには分からないかもしれない。つまり、この家にジンはあるか？

ポンソンビー　ジンですか、旦那様？　いいえ、旦那様。

スプラット師　召使部屋にはないのか？

ポンソンビー　はあ、いいえ、旦那様。

スプラット師　何てうかつだったんだ。この家にはジンがないことをお前がわたしに思い出させてくれるべきだった、ソフィア。それでは、ポンソンビー、一番近いパブで一シリング分買って来てくれないか？

レーリング夫人　いえ、駄目、買いにやらせないで。あたしは自分が許せないわ。

スプラット師　でも、お安いご用です。それに、わたしも飲んでみたい。

レーリング夫人　では、それなら、六ペニー分で充分よ。
レーリング　飲まない方がずっと元気ですよ、お母さん。
スプラット師　まあまあ、時々お母さんにちょっとしたご馳走を上げるのを惜しんじゃいけませんよ。
レーリング夫人　あたしには本当のご馳走なのよ。
スプラット師　ジンを六ペニー分だ、ポンソンビー。
ポンソンビー　はい、旦那様。

退場。

レーリング夫人　ロンドンじゃパブを見つけるのに遠くまで行かなきゃならないわよね？
スプラット卿　それだけの理由でわたしはロンドンに住んでいます。
ルイーズ　［つけこんで］あなたが絶対禁酒主義の問題を考えたことがあるか、聞いてもいいかしら？
スプラット卿　まさか！
ルイーズ　それで、あなたは世襲の国会議員なの？
スプラット卿　今はね。
ルイーズ　上院のことについてあなたと少し話したいわ。上院は廃止されるべきよ。
スプラット卿　ありがたい、わたしは涙なしに上院と別れますよ。
ルイーズ　わたしは前からこの機会を待っていたの。あなたは立派な方だから、わたしを支配するのにあなたにどんな事実上の権利があるのか教えてくれるでしょ？
スプラット卿　［たしなめるように］ねえお嬢さん、もしわたしがあなたを支配しているとしたら、それはついうっかりということです。
ルイーズ　わたしはあなたに個人的な関心はないわ。一個人として、あなたには全く関心がないもの。
スプラット卿　そんなこと言わないで。あなたはどうしてわたしの自尊心を情け容赦なくくじかなければならないんですか？
ルイーズ　わたしは特権階級の一員としてのあなたとこの問題を話し合いたいの。でも、わたしに分かっている限り、あなたは今のいろいろな大きな社会問題について完全に無知だわ。
スプラット卿　完全にね。
ルイーズ　あなたは保護貿易制度に賛成する理由を三つ挙げることができるかしら？
スプラット卿　正直言ってできませんが、わたしはたまたま自由貿易主義者なんです。
ルイーズ　労働者階級の住宅供給について何を知ってるの？
スプラット卿　何も。
ルイーズ　中等教育について何を知ってるの？
スプラット卿　何も。
ルイーズ　地代課税制度について何を知ってるの？
スプラット卿　何も。
ルイーズ　それでも、あなたは上院議員だわ。上院議員だというだけで、あなたの十倍の

知識や能力や教育のある数百万の人たちを支配する立法権があるのよ。

スプラット師　分かりました。分かりました。しつこいですよ。上手に端的に話しかけられることこそ彼の望むところです。

レーリング夫人　一度ルイを走らせたら、どんな荒馬だって止められないわ。

ルイーズ　それに、あなた方がどんなふうに時間を使っているのか、知りたいものだわ。時間の問題を考えてるのかしら？

ソフィア夫人・スプラット師　いいえ。

ルイーズ　あなた方は過去の時代によって任された今の時代に合わない仕事に慣れようとしているのかしら？

ソフィア夫人・スプラット師　いいえ。

スプラット卿　その傘を下に置いてもらえないかな。実にいらいらする。

ルイーズ　［怒ったように傘を床に投げつけて］きっとあなた方はあらゆる形の下劣な娯楽で生涯を過ごすのよ。競馬大会やビリヤードやギャンブルで。

スプラット師　分かりました。分かりました。

スプラット卿　実のところ、わたしはギャンブルをするにはあまりにも貧しすぎるし、競馬大会がある時は決まってリウマチにかかるし、生涯ビリヤードはやったことがありません。

スプラット師　あなたは急進党員なんですよね？

ルイーズ　急進党政府がペントンヴィル刑務所で三日間わたしの鼻の穴に汚いゴミを流し込んだことを知ってもらいたいわ。

ポンソンビーが大きなトレーに小さな酒の瓶を載せて入って来る。

スプラット師　ああ、ジンが来ました。

レーリング夫人　あら、**牧師様**、ジンなんて言わないで。下品に聞こえるわ。今は亡き亭主が生きていた頃は、よく言ってやったもんです。「船長、うちではジンなんて呼ばせないわよ」って。亭主はただの一等航海士でしかなかったけど、あたしはいつも船長って呼んでやったもんです。あんたにも会わせたかった。もし誰かがあたしに「レーリング夫人、素敵でハンサムで健康な男を見つけて」なんて言おうもんなら、あたしはジェイムズ・サミュエル・レーリングを探し出すわ。でも、信じられないわ、三十五足らずで死んだなんて。

スプラット師　お気の毒に。

レーリング夫人　ああ、それに、死ぬ前はひどい姿だった。彼の両脚を見せたかったわ。

ルイーズ　ママ。

レーリング夫人　ほっといておくれ、ルイ。お前はいつもがみがみ小言ばかり言う。

ルイーズ　いいえ、そんなことないわ、ママ。

レーリング夫人　逆らわないの、ルイ。認めないわ。

スプラット師　もう少しいかがですか――「ホワイト・サテン」は？

レーリング夫人　いいえ、結構よ、**牧師様**。我慢できなくなるから。最初の一杯が結構強かったし、家に帰らなきゃならないからね。

ルイーズ　とっとと帰った方がいいわ、ママ。

レーリング夫人　多分そうね。長い道のりだから。

ルイーズ　列車に乗った方がいいわ、ママ。

レーリング夫人　いや、バスで行こうよ、お前。あたしはバスに乗るのが好きなんだ。車掌がハンサムで紳士だからね。そう言えば、この前車掌と話し始めたら、終点でビールを一滴飲ませてくれた。ああ、素敵な若い男だったわ。

レーリング　そんなことしちゃいけないよ、お母さん。

レーリング夫人　だって、お前、そうだったんだ。それに、彼はバスの車掌をやっていても平気なんだ。車掌はいい金を稼ぐし、彼は結婚していると言ってたから、問題ないんだ。

ルイーズ　行きましょう、ママ、いつまで経っても出られないわ。

レーリング夫人　それじゃ、さようなら、**牧師様**、ありがとう。

スプラット師　遠いところをわざわざ来てくれてありがとうございました。十分楽しませていただきました。

普通の別れの挨拶があって、レーリング家の一家は出て行く。しばらくの間、完全な沈黙がある。ソフィア夫人、スプラット卿、スプラット師はウィニーを見る。ウィニーは真っ直ぐ前を見つめる。

スプラット師　［静かに］

俺は勇敢な船乗りじゃないから
海に出たことがない
海に落ちたら、本当に泳げない
あっと言う間に海の底にいるだろう

突然涙にむせんで、ウィニーが素早く部屋から出て行く。

ソフィア夫人　この獣、セオドア

スプラット師　ソフィア、ロックスハムに手紙を書いて、明日お茶に来るよう誘ってくれ。

第三幕終わり

第四幕

場は前幕と同じ。幕が開くと、ライオネルがマントルピースに両足を載せて肘掛け椅子に座っているのが見える。本を読んでいる。スプラット師が入って来て呼び鈴を鳴らす。

スプラット師　お前は物事を簡単に考えているみたいだな、ライオネル。

ライオネル　僕は過労にならないようにささやかながら最善を尽くしているんです。

スプラット師　お前の知性を向上させていたのは何の本だ？

ライオネル　ああ、探偵小説ですよ。先日ミューディーの店から届いたんです。

ポンソンビー登場。

スプラット師　ロックスハム卿は今日来ていたのか、ポンソンビー？

ポンソンビー　いいえ、旦那様。

スプラット師　おかしいな。お茶に来ていると思っていたんだが。ミス・ウィニーは家にいるのか？

ポンソンビー　はい、旦那様。

スプラット師　分かった。それだけだ。

ポンソンビー　よしなに、旦那様。

退場。

スプラット師　今日昼食の後で図書館で主教に出くわした。

ライオネル　そうですか？

スプラット師　グレーがコルチェスターに指名されたというあの発表の確証はない。

ライオネル　何か支障があったんでしょうか。

スプラット師　グレーが断ったとしても全然驚かないね。まだ若くて元気だという時に、大きなパブリックスクールの校長ほど将来にわたって大きなチャンスのある地位は想像できないからな。

ライオネル　［あくびしながら］そうですね、お父さん。

スプラット師　わたしが話しかけている時にあくびなんかしないでもらいたい。

ライオネル　すいません、お父さん。

スプラット師　ほとんどの人はわたしの話はどちらかと言えばむしろ面白いと分かっている。お前は一日中何もしないで……。

ライオネル　午後、結婚式を執り行いました。

スプラット師　わたしは近頃のお前には全く満足していない、ライオネル。お前は仕事に熱心でないみたいだ。随分無気力だ。大勢の国教反対者に四方八方囲まれているんだから、我々は立ち上がって行動を起こさなければならないんだぞ、お前。

お前は物事を簡単に考えすぎる。進取の気性に欠けている。ほら、わたしを見てみろ。間違いなくお前がまねるといい気力や精力の手本を示しているぞ。

ライオネル　あなたが特に何が不満なのか分かりません。

スプラット師　やれやれ、きっとお前はくだらない小説を読むよりもましな時間を費やすことができるはずだ。もしお前がやるべきことでもっとましなことがないのなら、どうして説教集を書き取って少しは自分の説教をましなものにできないか確かめないのだ。きっとそうするだけの余地はあるぞ。

ライオネル　説教集を読むのはあまり楽しい時間の過ごし方じゃありません、お父さん。

スプラット師　説教集はおどけて笑わせるのが目的で書かれている訳じゃない。お前に話したいことがあるんだ。

ライオネル　そいつはすぐに片づけてしまうに越したことはないでしょう。

スプラット師　この際、グウェンドリンのことについてお前がどうするつもりなのか知りたいんだ。随分長いことぐずぐずすと迷っているみたいだが。

ライオネル　さて、何の話ですか、お父さん？

スプラット師　やれやれ、お前も全くの馬鹿じゃあるまいし。お前の結婚についてはうんざりするほど話し合ってきた。お前がどうするつもりか知りたいんだ。

ライオネル　それを聞くのはいずれ母となる人だけかと思っていました。

スプラット師　こんなふうに待たせておくのは女性に対してよくないぞ。お前は彼女と結婚するつもりなのか、それともしないつもりか？

ライオネル　でも、お父さん、急ぐ必要はないんじゃないですか？

スプラット師　とんでもない、できるだけ急ぐ必要があるんだ。

ライオネル　どうしてですか？

スプラット師　ほかの誰かが彼女に結婚を申し込むことを考えていると信じるに足る十分な理由があるんだ。

ライオネル　誰なんですか？

スプラット師　言いたくないね。

ライオネル　［かなりむっとして］彼女は僕のことなんかちっとも気になっていないんだと思います。この前会った時、彼女はあなたのことしか話しませんでした。

スプラット師　［ほほえみながら］面白い話題が少ないからだ。

ライオネル　どんなに良いものでもありすぎると食傷することがあります。

スプラット師　では、率直に忠告しよう。お前が気をつけていないと、ほかの誰かが入って来て出し抜かれるぞ。

ライオネル　僕は悲嘆に暮れたりしませんよ、お父さん。

スプラット師　最近の若い者はどうなっているのか分からん。冒険心というものがない。グウェンドリンはわたしが今まで会った中で最も魅力的な娘の一人だ。際立ってかわいくて、財産はかなりのものだし、全くいい性格をしている。とにかく、わたしは義務を果たしたんだから、何があっても驚くなよ。

ライオネル　あなた自身が彼女と結婚することは考えていないんですか、お父さん？

スプラット師　［やや声を荒げて］わたしがそうすることに反対して言うことでもあるのか？

ライオネル　でも、彼女はあなたよりずうっと若いですよ。

スプラット師　言わせてくれ、お前、男の五十と言えば人生の真っ盛りだ。自慢じゃないが、お前の年の男でわたしの半分の精力と活力を持っている者はほとんどいないと思う。

ライオネル　［懐中時計を見ながら］それでは、夕食のために着替えに行こうと思います。

スプラット師　［皮肉っぽく］そうしなさい。いつも一時間半はかかるからな。

ライオネル退場。スプラット師は呼び鈴を押す。窓のところへ行って外を見る。ポンソンビーが入って来る。

スプラット師　ああ、ポンソンビー、ロックスハム卿以外の人にはウィニー（原文ではソフィア夫人だが、後とのつながりを考慮して変更）はいませんと言うんだ。

ポンソンビー　かしこまりました、旦那様。

スプラット師　［ポンソンビーが部屋を出ようとすると］ああ、それに――閣下がここに来て一、二分経ったら、わたしを呼んで席を外させてくれ。

ポンソンビー　かしこまりました、旦那様。

ポンソンビーが部屋を出て行くと、スプラット師は初代スプラット伯爵の肖像画に向かってまじめくさってウインクする。ウィニー登場。

スプラット師　なあ、お前、午後は何をしていたんだ？

ウィニー　何もしなかったわ。休んでいたの。

スプラット師　やれやれ、朝は忙しくしていたのか？

ウィニー　いいえ、今朝は何もしなかったわ。

スプラット師　レーリングさんは今日どうしているんだ？

ウィニー　彼とは会っていないわ。彼が忙しすぎて。でも、夕食の前に演説する予定の会合に行く途中で五分ほど寄ってくれることになっているの。

ポンソンビーが入って来てロックスハム卿の来訪を告げると、すぐあとにロックスハム卿が登場する。

ポンソンビー　ロックスハム卿です。

スプラット師　ああ、君か、会えてとても嬉しいよ。

ロックスハム　［ウィニーに手を差し出しながら］君は僕のことをもううんざりだと思っているに違いない。来てばかりいるから。

スプラット師　馬鹿な。わたしたちはあなたに会えていつも喜んでいる。この牧師館はあなたの別宅だと思ってもらいたい。

ロックスハム　ご親切にもソフィア夫人がお茶に誘ってくださいましたが、外せない用事がありました。家に帰る途中ほんのちょっと立ち寄っても構わないだろうと思

ったもので。ウィニーが明日オペラにご一緒していただけるか、母が知りたがっています。

スプラット師　きっと喜ぶと思います。

ウィニー　わたしのことを考えてくれてどうもありがとう。

ポンソンビー登場。

ポンソンビー　ご面倒でなければ、旦那様、お会いになりたいという方がいらっしゃっています。

スプラット師　いや、いや、いや、今は誰とも会えない。夕食のために着替えに行くところだ。

ポンソンビー　五分、時間をさいていただければ、非常にありがたく思うとその女性はおっしゃっています。

スプラット師　ああ、それなら、下りていかなければなるまいな。［ロックスハムに向かって］ちょっと失礼させてもらいますよ。

ロックスハム　ええ、どうぞ気になさらずに。

スプラット師　全く面倒なことだ。

スプラット師は出て行き、ポンソンビーが続く。

ロックスハム　何て運がいいんだ。

ウィニー　どうして？

ロックスハム　君と話せるチャンスはめったにないから。

ウィニーは答えないが、幾分当惑して、一輪のマーガレットの花びらをばらばらにする。

ロックスハム　あれはどうなるの？

ウィニー　［にっこりして、花びらを一つだけ残したまま花を差し出しながら］彼はわたしを愛していない。

ロックスハム　それは違うよ。彼は熱烈に君を愛している。これからもずっとそうだろう。

ウィニー　ああ、ハリー、わたしはとても不幸――ものすごく不幸なの。

ロックスハム　ああ、かわいそうに……。僕に期待しないようにって言った時、あれは本気だったの？

ウィニー　一週間前、そんなひどいことを言ったのよね？　ああ、わたしは完全に自分を軽蔑するわ。

ロックスハム　でも、どうして？　どうしてなの？

ウィニー　あなたは本当にわたしのことが好きなのかしら。

ロックスハム　僕は世界中で君が一番好きだ。愛してる。愛してる。愛しているんだよ。

ウィニー　あなたがそう言うのを聞くのは好きよ。

ロックスハム　ウィニー！

ウィニー　わたしはとてもみじめなの。誰かにすごく好かれたい。

ロックスハム　どうしたのか教えてくれたらどうなの？　僕に何かできるかもしれない。

ウィニー　親切にしてくれてありがとう。あなたはわたしが思っていたよりもずっと親切なのね。

ロックスハム　ウィニー、僕を愛していると言ってくれないか？

ウィニー　わたしが初めてあなたに会ったのはいつだったか覚えてる？　あなたはライオネルと一緒にイートンからここに来たのよ。

ロックスハム　友達になるのに長くはかからなかった。

ウィニー　テニスでわたしが勝つと、あなたはすごく怒ったものだったわ。

ロックスハム　いや、君が勝つことはなかった――僕が勝たせてあげた時以外はね。休みの日にどれだけ川を船で行ったり来たりしたものか覚えてる？

ウィニー　あなたが落ちた時はどんなに怖かったことか。

ロックスハム　嘘だ！　君はキャッキャッと笑い転げていた。

ウィニー　［ため息をついて］すごく疲れたわ。すごく疲れる一日だったの。

ウィニーはソファーに座り、ロックスハムはその側に座る。

ロックスハム　君がほかの子たちと話すから、僕は大いに嫉妬したものだった。

ウィニー　そんなこと、決してなかった！　それはいつもあなたの方だったわ。ひどい浮気性なんだから。［ロックスハムはウィニーの手を取るが、ウィニーは抵抗しない。］あなたはいつからわたしを好きになり始めたのかしら？

ロックスハム　僕は君を好きだったことはない。ずっと愛していた。

ウィニー　［ほほえみながら］わたしがおさげをしてつま先が四角いブーツを履いていた時も？

ロックスハム　いつだって。そして、これからもずっとだ。ああ、ウィニー、君が僕を愛せないと言った時、あれは本気だったの？

ウィニー　よく覚えていないの。それまで愛せなかったんだと思う。

ロックスハム　ウィニー。僕と結婚してくれるだろ？　ああ、ウィニー！

ウィニー　あなたを幸せにするために何でもするわ。

顔を赤らめながら、ウィニーが唇をロックスハムの方に向けると、ロックスハムは熱烈にキスする。外でスプラット師の声が聞こえる。

スプラット師　『女心の歌』（ヴェルディ作曲のオペラ『リゴレット』の中でマントヴァ公爵によって歌われるアリア）。トゥラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ。［入って来ると、若い二人が一緒にソファーに座っているのを見てちょっと驚く。］やあ、もう帰ったに違いないと思っていた。思っていたよりも長く引き留められてしまって。

ロックスハム　［ウィニーに向かって］お父さんに話してもいいかな？

ウィニー　ええ。

ロックスハム　スプラット牧師様、ウィニーがわたしの妻になると約束してくれたことをお知らせしたい。

スプラット師　何だって！　素晴らしい！　素晴らしい！　あなた、わたしはそれを聞いて嬉しい。我が子よ！

スプラット師が両腕を広げると、ウィニーはスプラット師の胸に顔を隠す。スプラット師は愛情を込めてウィニーにキスしてから、ロックスハムと握手する。

スプラット師　この子があなたを熱愛しているのは分かっていました。女性の性格を知ることにかけてはわたしを信じなさい。

ウィニー　［笑って、ロックスハムに手を差し出しながら］お父さんは素晴らしいわ。

ロックスハム　あなたのお陰でとても幸せです。

スプラット師　さあ、あなた、ソフィアに言いに行きなさい。自分の部屋にいるでしょう。

ロックスハム　わたしがですか？

スプラット師　知っての通り、あれはすぐかっとなる。あなたが自分で言った方がいいと思う。

ロックスハム　それで、ウィニーは？

スプラット師　ウィニーとわたしもすぐ行く。

ロックスハム　わたしは屠殺場に行く子羊みたいだ。

ロックスハムはウィニーに向かってにっこりして行く。ロックスハムが奥の部屋へ行って見えなくなると、ウィニーは投げキッスをする。スプラット師は非常に面白がっている表情を浮かべて娘を見る。ウィニーは顔をそむけて立ったまま本のページをめくり始める。

スプラット師　無遠慮だろうか、なあウィニー、お前がレーリングさんとの婚約をいつ破棄したのか聞いたら？

ウィニー　［目を上げながら］破棄なんかしていないわ。

スプラット師　［優しく質問する口調で］それじゃ、両方と結婚するつもりなのか？

ウィニー　ああ、お父さん、助けてちょうだい。わたしは本当に気が狂いそうなの。

スプラット師　レーリング夫人は訛りがあってジンを飲み、一方その娘は横柄で下品だという事実が、バートラム・レーリングさんに対するお前の愛情に何か影響があったなんてわたしに分かるだろうか？

ウィニー　わたしはひどい俗物だと思う、お父さん？

スプラット師　もちろん、お前は俗物だが、わたしはお前を変えたいとは思わない。わたしはアングロサクソン民族の最も価値ある特質に対する俗世間の侮辱は分かち合わない。俗物根性はわたしたちを偉大な国民にしただけでなく、キリスト教の国民にした。なぜなら、俗物根性は、まず現世で、そして来世で、我々の地位を向上させたいという単なる欲望に過ぎないからだ。わたし自身に少しでも

俗物根性があったら、今頃は低い身分で苦しんでいないと思わざるを得ない。

ウィニー　［自分の考察を続けながら］わたしはずいぶん馬鹿なまねをしてしまった。彼に不意打ちを食らって、一瞬彼のような生き方ができると思った。でも、彼が怖い。

スプラット師　［真剣に］どうしても知りたいことが一つあるんだ、ウィニー。正直に言って、どっちを取るんだ？

ウィニーは一瞬躊躇してからすすり泣いてちょっと涙にむせぶ。

ウィニー　正にそこよ。両方とも愛しているの。

スプラット師　［びっくり仰天して］何だって！

ウィニー　どっちの人とも一緒にいると、その人の方がもう一人よりもずっと素敵だと思うの。

スプラット師　［かなり苛立って］本当に、ウィニー、そんなふうにぐずぐず迷ってちゃいけない。

ウィニー　バートラムに会うと、すぐに我を忘れてしまって。崇高な気高い考えで満たされるの。でも、彼の理想に従って行動することはできない。彼は今のわたしを愛しているんじゃなくて、わたしがなるかもしれない女性を愛しているのよ。だって、バートラムは英雄だから。

スプラット師　［いらいらして］馬鹿馬鹿しい！　彼は物書きだ。

ウィニー　でも、ハリーは今のわたしと違うものは望んでいない。彼はこのわたしだから愛してくれている。わたしに欠点なんかないと思っていて……。

スプラット師　［遮って］本当に、ウィニー、お前の年頃の娘が自分の気持ちをそんなふうに分析するのはよくないと思う。わたしは心を決められない人間は嫌いだ。

ウィニー　ええ、でも、どっちと結婚したいかははっきりしてるのよ。

スプラット師　［穏やかな気持ちになって］おお、そうか、それは地主の方だろう。

ウィニー　わたしを窮地から救い出してもらえるかしら、お父さん？

スプラット師　いいか、何だかんだ言ってもお前の哀れな父親はまだ役に立つんだ。わたしにどうしてほしいんだ、お前は？

ウィニー　バートラムが来たら、すべて間違いだったから結婚できないって言ってほしいの。

スプラット師　わたしが言っても、彼は信じないだろうよ。

ウィニー　もう一度彼に会う勇気がないの。すごく恥ずかしいから。

ポンソンビーが入って来る。

ポンソンビー　レーリング様です、旦那様。お嬢様はご不在だと申し上げたのですが……。

スプラット師　［ポンソンビーの説明を遮って］ああ、分かった、上がるように言ってくれ。

ポンソンビー　かしこまりました、旦那様。

スプラット師　［ウィニーに向かって素早く］隣の部屋で待っていなさい。

レーリングが部屋に入って来る直前にウィニーはそっと出て行く。

ポンソンビー　レーリング様です。

スプラット師はどこから見ても心のこもった様子でレーリングら近寄って行く。レーリングは両手でバラの花束を持っている。下に置く。

スプラット師　こんにちは。こんなに遅いのに寄ってくれてありがとう、レーリングさん。

レーリング　午後は家にいるとウィニーが言っていたものですから。

スプラット師　もちろん、あなたがわたしに会いに来ると自惚れていた訳ではありませんが、たまたまあなたとちょっとばかり話をしたかったんです。

レーリング　何なりとおっしゃってください。

スプラット師　［陽気に］非常に重要な段階にあなたたち若い二人が進もうとしています。

レーリング　その時には、わたしたちは賢明ですから、軽い気持ちで進みます。

スプラット師　おやまあ――素晴らしい。ところで、あなたたちは二人とも結婚するのには若いと思いましてね。

レーリング　わたしは二十五です、**牧師様**、そして、ウィニーは二十一です。

スプラット師　二人ともそうは見えない。

レーリング　恐らく。

スプラット師　わたしが個人的にあなたを大いに尊敬し、あなたの才能を心から称賛していることは言うまでもありません。しかし、我々は才能がその長所によって必ずしも報いられない生きているので、あなたが何に頼って生活するつもりか知りたい。

レーリング　わたしは年二五〇ポンドほど稼ぎますし、ウィニーは母親から一五〇ポンドほどもらいます。

スプラット師　よくご存じで。

レーリング　ウィニーが教えてくれました。

スプラット師　言うまでもない。あなたがサマセット・ハウス（遺言検認登記本所がある官庁用建物）で遺言書を調べたなんていささかも思いませんよ。それで、年四〇〇ポンドで生活することにウィニーが満足できると思いますか？

レーリング　母が稼いでいた額の三倍です。

スプラット師　［実に丁重に］それとこれとどんな関係があるんでしょうか？

レーリング　お嬢さんが上流社会の見かけ倒しの装身具やけばけばしい手回り品のことをちょとでも気にかけると思うんですか？

スプラット師　娘だって人間ですからね、レーリングさん。驚くかもしれないが、実を言うと、わたしは娘の幸せのためには車が必須だと思っているんです。

レーリング　わたしはウィニーのことを分かって愛しています。あなたは彼女がかわいいけど馬鹿な娘だと思っている。かつてはそうでした。わたしは彼女を人間性を

持った女性にしました。今や彼女は本当の女性であって、上流社会のあらゆる見せかけや軽薄さを嫌っています。

スプラット師　娘がそう言ったんですよね？　間違いなく、我がスプラット家にはユーモアのセンスがありますね。

レーリング　ありがたいことに、今や彼女は、この怠惰で利己的な人たちの小さな社会がどんなに狭いものか知っています。彼女は働きたがっています。仲間たちと一致団結して働いて、立派に戦い抜くことを望んでいます。

スプラット師　あなたの鼻の頭にいぼがあったり、目がやぶにらみだったりしても、あなた、この上流社会がうわべだけの馬鹿げたものだということをウィニーが思いついたと思いますか？

レーリング　あなたはすべての人間が悪人だと思っている。

スプラット師　とんでもない、わたしは慈悲深いからすべての人間が愚かなだけだと思っている。

レーリング　［かっとなり始めて］あなたは何を言いたいんですか？　遠回しに言ってないで、潔くはっきり言ったらどうなんですか？

スプラット師　ねえレーリングさん、あなたに上流社会の慣習を分かってもらいたい。自分の娘に結婚を申し込んでいる青年の境遇を調べるのは明らかにわたしの義務なんです。

レーリング　あなたがわたしたちの婚約に賛成だと聞いた時、わたしは信用していませんでした。あなたがわたしを軽蔑しているのは気づいていましたから。あなたのお世辞がすべて大嘘なのは分かっています。

スプラット師　［平然と］きっと、あなたが冷静になったら、使うのにふさわしいと思っていた表現のいくつかを後悔するでしょう。でも、そんなことでわたしはあなたに全く悪意を抱いていないと即座に言いますよ。

レーリング　どうもありがとうございます。でも、少しでも後悔しそうな表現は使っていないと思います。

スプラット師　それなら、あなたよりずっと年長の者として、そして聖職者として言わせてもらうが、明らかに、あなたにはキリスト教徒らしい思いやりが欠けているし、上流社会の礼儀作法も知りません。

レーリング　わたしに二日前にした承諾を引っ込めるという意味だと解釈してほしいんですか？

スプラット師　あなたのお姉さんが精神病院にいるということを知りました。ご不幸をお察しすることは言うまでもありませんが、その件についてのわたしの考えは実にはっきりしています。

レーリング　［遮って］馬鹿馬鹿しい。フローリーが子供の頃に事故があったんです。階段から落ちて、それ以来彼女は……。

スプラット師　頭が完全に正常という訳じゃない、そうお母さんが言っていましたね、レーリングさん。しかしながら、どんな子供だって階段から落ちますが、そういう人間の全部が全部精神病院に監禁する必要があるほど虚弱ではないことに気づいてもらいたい。

レーリング　ウィニーがわたしを愛していることに変わりはありません。
スプラット師　それは本当に確かですか？
レーリング　自分の名前や自分の命と同じくらい確かです。
スプラット師　それでは、つらいことですが、あなたが間違っていることを知らせなければなりません。ウィニーは自分の愛情の強さを見誤っていたことを認めています。
レーリング　そんな馬鹿な。
スプラット師　彼女から、結婚するほど好きではないことに気づいたとあなたに言ってくれと頼まれました。彼女はもたらした不幸を後悔していて、自由にしてもらうことを願っています。
レーリング　そんなはずはない。
スプラット師　紳士としての名誉にかけて、わたしは嘘偽りのない本当のことを言いました。
レーリング　それなら、彼女の口からそれを聞きたい。
スプラット師　もう会わない方が二人のためだと思いますよ。
レーリング　会わない訳にはいきません。会うまでは帰りませんよ。帰りませんからね。

スプラット師は一瞬ためらってから肩をすくめる。奥の部屋に向かって行き、ドアを開けて呼ぶ。

スプラット師　ウィニー！［一瞬間があってから、ウィニー登場。］二人をつらい目に遭わせたくなかったんだが、レーリングさんがどうしてもお前に会いたいと言うんだ。
レーリング　そんなはずないよね、ウィニー？
ウィニー　ごめんなさい。
レーリング　［スプラット師に向かって］どうか二人だけにさせてください……。［スプラット師が今にも断ろうとしているのを見ながら］まさか、異存はありませんよね。
スプラット師　隣の部屋で待つことにしよう。

スプラット師は奥の客間に入って行く。レーリングは自分が持って来たバラに目を止めると、ウィニーに手渡す。

レーリング　花を持って来たんだ、ウィニー。
ウィニー　ご親切にありがとう。

レーリングは一瞬ウィニーを見る。ウィニーは目をそらしたままである。

レーリング　この前、君は世界中の誰よりも僕を愛していると言った。何をされて僕に愛想が尽きたの？

ウィニー　誰にも何もされていないわ。
レーリング　それに、突然、何の説明もなしに、お父さんを君が間違ってたと言いに寄こした。
ウィニー　あなたを苦しめてしまったこと、すべて大変申し訳ないと思ってるわ。
レーリング　君が恐れているのは、僕が貧しくてこれと言って特別な人間じゃないからなの？　でも、君だってそんなことは前から分かっていた……。僕たちが喜々として計画したこと、一致団結して働く生活や仲間たちのために立派に戦うことを、どうして全部犠牲にできるのだろう。
ウィニー　［激して］そんなの嫌よ。
レーリング　ウィニー！
ウィニー　ああ、バートラム、理解しようとしてちょうだい。わたしたちが大きな間違いを犯したことを分かってほしい。ありがたいことに、わたしたちは手遅れになる前にそれに気がついたのよ。わたしはあなたが望むような人生を送るために生まれたんじゃない。わたしは全く場違いなのよ。
レーリング　でも、どうして？　どうしてなの？
ウィニー　わたしが労働と禁酒のことで感激したのは単なるポーズだったの。わたしのことを賢くて創意に富んでいると思ってほしかったから。わたしは貧乏人が嫌いよ。関わりたくないわ。恐らく、貧困や犯罪はとても恐ろしいことでしょうけど、わたしは目を閉じて忘れたいの。ほこりやごみも嫌いよ。スラム街は怖いと思う。わたしたちが結婚したら、どんなひどいことになるか分からないの？　わたしはあなたの邪魔になるだけで、二人とも完全に不幸なことになるのよ。
レーリング　お父さんが、君の幸せのためには車が必須だと言っていた。歩いて出掛けようが、派手な車で出かけようが、気にしてはいけない。人生は充実していて、やるべき仕事はたくさんあるんだ。僕たちが義務を果たせれば、それがどうしたと言うの？
ウィニー　でも、わたしは義務なんか果たしたくないわ。幸せになりたいのよ。
レーリング　人間社会のことはどうでもいいの？
ウィニー　人間社会ですって？　大変申し訳ないけど、あなたにどうやってワイシャツの袖を取り外すか見せられてからは、人間社会のことは気にならなくなったと思う。
レーリング　ああ！　どうしてそんなに軽薄でいられるんだ！　君たちはみんな同じだ、揃いも揃って、細かいことにこだわって、了見が狭くて、軽薄なんだ。
ウィニー　必要とされているのは一つ英雄的行為だけじゃないわ。来る日も来る日もさえない不潔な服を着て英雄らしくしている強さよ。だから、絶対にそれから逃げることはできない。永遠に続けると心を決めなければならない。わたしには自分がひどく狭苦しい通りのぼろ家に住んで社会主義者たちにハイティー（午後五～六時ごろの肉または魚の料理のつく軽食、お茶と夕食を兼ねる）を出しているのが見えるの。もう少しで叫ぶところよ。
レーリング　どれもこれもさいなことだ。
ウィニー　そう、あなたの話はどれもこれも大変結構なことだわ。あなたは贅沢しないで

育てられたから、もちろん困ることはないわ。あなたはわたしがあなたのお母さんみたいに家事をやったり繕いものをすることをとても簡単なことだと思っているけど、頭を使って働いてきたあなたにとって、朝から晩まで道路を修理することの方が簡単だと思うの？

レーリングが答える前に、奥の部屋でロックスハムの声が聞こえ、そのすぐ後にロックスハムが性急に入って来て、スプラット師が続く。

ロックスハム　ああ、ここでしたか、牧師様。ウィニーはどこだ……。僕はやったよ、ウィニー。彼女に話してお互いの首に抱きついた。［レーリングを見て］ああ、失礼。君だけだと思ったものだから。やあ、レーリングさん。こんにちは。

レーリング　［握手しながら］こんにちは。

スプラット師　二人が知り合いだとは思わなかった。

ロックスハム　ええ、そうなんです。わたしは先日レーリングさんが演説した会議の議長でした。ところで、わたしはあなたの本を読みました。

スプラット師　そう、非常にいい本です。わたしはずっとそう思っていましたよ、レーリングさん。わたしは最初にその素晴らしくいい点を見つけた中にいたと言えるのを誇りに思います。

ロックスハム　［ウィニーに向かって］ねえ、ソフィア夫人は君を温かく迎えたがっている。すごく喜んでいるよ。

レーリングはびくっとして、ロックスハムを鋭い目で見る。

スプラット師　セント・アーミンズ公爵夫人がどんなに深く感動したか、あなたが話してくれたのを覚えています。きっとあなたもヴァルトブルク・ホッホスタインの王妃が面白く読んだと聞いたら嬉しいでしょう。

レーリングは無視してウィニーとロックスハムを疑わしげに見る。ロックスハムはウィニーに近寄って行き、幸せそうにほほえみかけている。

ロックスハム　ソフィア夫人が僕を食事に誘ってくれた。着替えに行かなければ。

スプラット師　おお、そうか、そうか！　大歓迎だよ。［懐中時計を見ながら］遅れているに違いない。せかせたくはないが、うちのコックは時間厳守ということにとてもうるさくてね。今、何時ですか、レーリングさん？

レーリング　八時五分前です。

スプラット師　やれやれ、そんなに遅いとは思わなかった。

ロックスハム　でも、服を着るのに十分しかかかりません……。君は今夜何を着るつもりなの、ウィニー？　花を持って来たいんだけど。

ウィニー　ええ、お願い――赤いのを。着ける花がないのよ。

レーリング　僕が持って来たのをもう忘れたの？

ウィニー　あっ！

スプラット師　［助け舟を出して］いや、違います。もちろん、そんなことありませんよ。でも、あなたが持って来たのはとても美しいから、身に着けるのはもったいないでしょう。すぐに枯れてしまいます。水に入れておかなければいけないよね。

ロックスハム　［スプラット師の手際のよさにほほえみながら］あなたはほんの一瞬でソフィア夫人になれるに違いない。こういう時に人間がどういうものだかご存じだから。

スプラット師　その通り、行きなさい、二人とも。そうすれば、レーリングさんに言わなければならないことを済ませられる。［レーリングに向かって］引き留めて申し訳ない。あなたは急いで出なければならないのに。

レーリング　わたしはウィニーに用があるんです。ロックスハム卿は一、二分待っても構わないでしょう。

スプラット師　できれば、話の続きはまた今度にしてもらえませんか、レーリングさん。間に合わなくなるんじゃないかと心配なので。

レーリング　わたしからロックスハム卿に状況を説明した方がいいのでは？

スプラット師　いえ、その必要は全くないと思います。さあ、さあ、レーリングさん、大人気ないことはやめて。この世では皆、どうにもならないことには従わなければ。

ロックスハム　皆さんどうなっているんですか。

ウィニー　［いささかぎょっとして］ほかの部屋に行きましょう。もうレーリングさんに言うことはないわ。

レーリング　でも、僕はまだ君に言うことがたくさんあるんだ。［ロックスハム卿に向かって］どうかわたしたちだけにさせてください。失礼に思われたら申し訳ないが。

スプラット師　わたしたちだけにしてもらった方がいいと思うよ、ロックスハム。この馬鹿げた状況については後ですっかり説明するから。

レーリング　［即座に怒って］馬鹿げた状況と言いましたよね？

ロックスハム　［困惑して］分かりました、家に帰って着替えます。母は大喜びするでしょう。

ロックスハムは出て行く。

スプラット師　やれやれ、レーリングさん、あなたの振る舞いは全く普通じゃない。わたしはすべてあなたのためを思ってやったのだから、少しは感謝を期待する権利があると思う。

レーリングは当惑してロックスハム卿を見送る。

レーリング　彼が言っていたことはどういうことだったんですか？　どうして彼が花を持って来なければならないんですか……。そうか！

真相が分かってくると、レーリングはロックスハムの跡を追うかのようにドアに向かって大股で歩いて行く。スプラット師が邪魔する。

スプラット師　どこへ行くんですか？　あなたは自制心をなくしていると思いますよ、レーリングさん。

レーリング　［ウィニーの方を向いて］君はロックスハム卿とも婚約しているのか？

スプラット師　それは随分失礼な質問だと思う。

レーリング　お願いだから、ほっといてください。［ウィニーに向かって］教えてほしい。どうしても答えてもらいたい。

スプラット師　やれやれ、これはあんまりだ。どうしてあなたを階段から蹴り落とさないのか、全く不思議なくらいだ。

レーリング　多分、わたしが労働者でごつい手をしているからでしょう。

スプラット師　どうやら、ペッカム・ライのやり方がサウスケンジントンには全くふさわしくないということがあなたは思いも寄らないみたいだ。

レーリング　［ウィニーに向かって］君はあの男と婚約しているのか？

ウィニー　［一瞬躊躇してから］それを隠す必要はないわ。

レーリング　だから僕を見捨てた。素晴らしい申し出だから断れなかったんだ。

スプラット師　本当に、レーリングさん、娘を侮辱するのは許せない。出て行ってください。さもないと、召使たちを呼ばなければなりません。

レーリング　お嬢さんが彼を受け入れた正にその時、わたしと婚約していたことを話したら、ロックスハム卿は何と言うと思いますか？

スプラット師　［にやにやと薄笑いを浮かべて］わたしは自分がこんな状況であなたが言っていることの的確さを否定するのはもっともだと思わざるを得ません。

レーリングはしばらくの間、ありったけの軽蔑の目でスプラット師を見る。

レーリング　ああ、何という逃れ方だ！　上流夫人と結婚したら自分の品位を下げていたかもしれなかった。

レーリングは部屋から飛び出して後ろ手にドアをバタンと閉める。

スプラット師　何て芝居がかっているんだ。何てひどく芝居がかっているんだ。

ウィニー　何て下品な。

スプラット師　これがお前にとって警告や教訓になるといいが。親の言うことを聞かずに不敬にももっとましな判断に逆らうとどうなるか分かっただろう。お前のせいで父親が嘘をつかなければならなくなりそうになったことを忘れないでくれ。

ウィニー　［くよくよと落ち着かずに］わたしはすっかり打ち明けるべきなの、お父さん？

スプラット師　ロックスハムにか？　そんなことをしてはいけない。そして、お前は自分のわがままから言うことを聞かないでこらしめを受けたんだから、今度はわた

しの言う通りにしてもらいたい。ロックスハムは敏感だから、心配の種を与えないことがお前の義務だ。そして、何があろうと、結婚生活を始めるに当たって、夫にはすべてを告白しないことだ。本当のことを全部話してはいけない。そうやって永久に騙すことにするんだ。

ウィニー　でも、もし彼が気がついたら？

スプラット師　［実にほっとして］何だ、それだけか？　良心の声かと思った。それは杞憂にすぎない。わたしに任せなさい。彼に知らせる必要があることだけ、わたしが話すから。さあ、お前、二人とも着替えに行かなくては。

ウィニー　分かったわ、お父さん。

ウィニーはスプラット師にキスすると、走って出て行く。スプラット師が続こうとすると、ポンソンビーが登場してグウェンドリン・デュラントの来訪を告げる。グウェンドリンが入って来る。イブニングドレスを着ている。

ポンソンビー　ミス・デュラントです。

退場。

グウェンドリン　［娘らしい衝動的な感じで］ああ、怒らないでください。あまりにも早すぎるのは分かっています。

スプラット師　［優しく］けっして早すぎることなんかありませんよ。

グウェンドリン　夕食は八時だと思っていたけど、ポンソンビーに十五分過ぎだと言われた時、車が出てしまっていたから、また出られなかったの。

スプラット師　それは慈悲深い神の摂理だと思います。誰にも邪魔されずに五分間あなたとお付き合いできます。

グウェンドリン　まあ、でも、ご面倒かけちゃいけないわ。ウィニーが着替えている間一緒にいちゃいけないか、聞きにやったところなの。

スプラット師　わたしはそんなに無頓着に放免されるのはご免です。まず最初にどうしても言いたい。今夜のあなたは何て魅惑的なんだ。

グウェンドリン　ここに来る時はいつも一番いいフロックを着るのよ。

スプラット師　あなたがそうするのはどんどん白髪になっていく中年の聖職者の紳士のためだと思えたらいいのだが。

グウェンドリン　わたしのこと、かわいいと思ってほしいわ。

スプラット師　そうなの？

グウェンドリン　わたしが一番魅力的に見えている時、あなたはいつもそう言うけど、もちろん、わたしはそう見えるように努力しているのよ。

スプラット師　わたしが二十五でないことがますます残念です。

グウェンドリン　どうして？

スプラット師　もしそうなら、即座に結婚を申し込むからです。

グウェンドリン　もしそうなら、多分わたしは断るでしょうね。
スプラット師　それはどういうことですか？
グウェンドリン　ほとんど悲惨なくらいはっきりしているわ。
スプラット師　グウェンドリン！
グウェンドリン　ウィニーはわたしが部屋に行くのが嫌なのかしら。
スプラット師　わたしがあなたとの会話に普通以上の喜びを感じているなんて、あなたは思いもしないでしょうね。
グウェンドリン　わたしに分かるのは、あなたほど話していて楽しい人に会ったことがないということだけ。
スプラット師　わたしの心は相変わらず若いままだけど、五十なんですよ、グウェンドリン。五十なんです！
グウェンドリン　あなたがいくつかなんて、自問したことはないわ。わたしより年上だなんて感じたことはないもの。
スプラット師　グウェンドリン、あなたの側にいると、わたしは夏の朝みたいに若い気がします。少年の気持ちを持っているのに、年がどうだというんですか？　わたしはあなたを称賛しているし、愛しています。わたしのことを馬鹿げていると思わないでください。
グウェンドリン　馬鹿げているなんて、ちっとも思わないわ。
スプラット師　グウェンドリン、わたしの妻になってくれますか？
グウェンドリン　［ほほえみながら］ライオネルはどうするの？
スプラット師　ああ、ライオネルなんか糞食らえだ。

グウェンドリンが両手を差し伸べると、スプラット師はその手を取ってキスする。

グウェンドリン　もうあなたは着替えに行かなければ。わたしはウィニーに話しに行くわ。
スプラット師　あなたはわたしを最高に幸せな男にしてくれました。

スプラット師がグウェンドリンのためにドアを開け、グウェンドリンは出て行く。スプラット師は懐中時計を取り出して見る。

スプラット師　おっと、急がなければ。

ポンソンビーがスプラット卿を案内してすぐに退出する。

ポンソンビー　スプラット卿です。
スプラット卿　やあ、セオドア、まだ着替えていないのか。
スプラット師　もう聞きましたか、トム？
スプラット卿　ここに歩いて来る時にロックスハムが通りかかって、車を止めて話してくれた。大満足みたいだ。

ソフィア夫人が見事にイブニングドレスを着て入って来る。

ソフィア夫人　着替えないの、セオドア？　間に合わなくなるわよ。

スプラット師　午後は忙しくてね。

ソフィア夫人　［スプラット卿に向かって］ウィニーの新しい婚約のこと、どう思いますか？

スプラット卿　二十五ポンドかかると思う。

ソフィア夫人　どういうこと？

スプラット卿　セオドアが望み通りの結果を出せないだろうとフィッツジェラルド夫人に二十五ポンド賭けたんだ。

スプラット師　彼女が勝ってもおかしくない。彼女はわたしを信頼している。わたしがやると決めたらやり遂げることを知っています。

スプラット卿　馬鹿な。彼女はわたしが思っているよりもずっとお前のことを平気で悪いことをする奴だと思っているだけだ。

スプラット師　おやまあ！　ほんの冗談でしょう、トム。フィッツジェラルド夫人がわたしの知っている中で最も魅力的な女性だという事実は変わりません。彼女の夫の馬鹿な遺言がなければ、あなたが彼女と結婚するべきです。彼女は正にあなたが望むタイプの妻です。

スプラット卿　どんな馬鹿な遺言なんだ？

スプラット師　それは、再婚すると収入を一銭残らず失うという、若い女性にとって実に不当な条件がついているらしい。

ソフィア夫人　［すかさずスプラット師を責めるように］あなたはフィッツジェラルド夫人に結婚を申し込んでいたの、セオドア？

スプラット師　お前、一体どうしてそんなこと聞くんだ？

ソフィア夫人　彼女が年五千ポンドの収入がある未亡人が再婚するのは馬鹿げていると考えるのは極めて当然だわ。ずっと前に打ち明けられたんだけど、彼女に求愛する人が迷惑なくらい気持ちが高まってきたら、未亡人でいる間しか収入を得られないことを分からせるんですって。それが情熱に与える効果はほとんど奇跡だそうよ。

スプラット師　嘘だろ？

ソフィア夫人　本当よ。遺言書を見たもの。

スプラット師はびっくり仰天して言葉を失う。

スプラット卿　［叫びながら］セオドア、お前は騙されていたんだ。なあ、セオドア、セオドア。お前みたいな悪賢いおやじが。

スプラット卿は笑い出す。左右によろよろと歩く。笑いで体が揺れる。ソフィア夫人にも伝染し、笑い声を響かせる。スプラット卿は怒り狂う。

スプラット師　黙れ。黙れ。

二人がはっとして笑うのをやめると、スプラット師はその機会を捕らえて説明を差し挟む。

スプラット師　フィッツジェラルド夫人は非常に尊敬すべき人物だから、わたしは彼女に不利なことは最も言いそうにない人間であるべきです。しかし、彼女が聖職者の妻に絶対に欠くことのできない確固とした性格や礼儀のセンスを持っているとは少しも思えませんね。

スプラット卿はもう我慢できなくなってまたわっと大笑いしだしてなかなか止まらない。ライオネルが夕食用の服を着て入って来る。

ライオネル　おや、どうしたんですか？

スプラット師　［怒り狂って］分からないのか？　伯父さんは自分が冗談を言ったのにすっかり受けているんだ。

ライオネル　おや、まだ着替えてないんですね、お父さん。

スプラット師　やれやれ、ライオネル、そんなことは分かっている。わたしを全くの馬鹿だと思っているのか？

ポンソンビーが入って来るが、小さな盆に電報を載せていることにスプラット師はすぐには気づかない。

スプラット師　［いらいらして］それは何だ？　ああ、電報か。

スプラット師は電報を開くと、叫び声を上げて飛び下がり、あえぎながら椅子にどっかと座って手を頭に当てる。

ライオネル　お父さん、どうしたんですか？

スプラット師　シェリー酒を一杯くれ。すっかり動転してしまった。

ライオネル　［執事に向かって］早くしてくれ、ポンソンビー。

ポンソンビーは出て行く。

スプラット卿　どうしたんだ、セオドア？

スプラット師　ソフィア、ソフィア、政府がわたしに空いているコルチェスターの主教の職を提案したと知ったら、お前も喜ぶだろうな。

スプラット卿　おお、わたしも嬉しいよ、セオドア。

ソフィア夫人　そう、やっぱりグレー博士は断ったのね。

スプラット師　［勿体ぶって］彼は提案されていなかったんだ。わたしは、ソフィア、二番手になるような人間ではない。しかも、そうなることを延ばさないように、理由なんか考えないで、率直に電報で提案された通り受け入れるつもりだ。

スプラット卿　おめでとう。

この二つのセリフの間にポンソンビーが入って来て、スプラット師にシェリー酒を一杯注ぐ。

スプラット師　［グラスを手に取りながら］ポンソンビー、わたしは主教だ。

ポンソンビー　それをお聞きしてとても嬉しいです、閣下。

スプラット師はその称号を聞いて満足気にほほえむ。

スプラット師　ポンソンビー。

ポンソンビー　はい、閣下。

スプラット師　何でもない。それでいい、ポンソンビー、行っていいよ。

ポンソンビー　かしこまりました、閣下。

スプラット師　今度こそ、夕食のために着替えに行ける……。そうだ、ライオネル、わたしの代わりに短い告知を書いてくれないか？

ソフィア夫人　セオドア、うちのコックがどんなに気が短いか知ってるでしょ。わたしたちが時間通りに席に着かないと、決まって酔っ払うんだから。

スプラット師　お前が自分の体の欲求のことをそんなふうに説明してくれても、ありがたく思うとは言えないな、ソフィア。お前の心はもっと高尚なことになじむんだと思っていた。

ソフィア夫人　馬鹿馬鹿しいわ、セオドア。

スプラット師　ソフィア、わたしはずっとお前がふさわしい敬意でもってわたしを扱っていないと思っていた。もうお前がわたしに対して不作法な軽薄さと下品な皮肉を混ぜこぜにして振る舞うのは許すことができない。わたしの地位は完全に変わったんだ。用意はいいか、ライオネル？

ライオネル　はい、お父さん。

スプラット師　正式に発表します。タンカー城のロックスハム卿とコルチェスターの主教に選任された聖堂参事会会員セオドア・スプラット牧師閣下の――閣下は正式に綴るんだ、ライオネル――一人娘ウィニフレッドとの婚約が整いました。スプラット氏がよく知られているのは……。

ライオネル　よく知られているのは――はい？

スプラット師　お前は随分にぶいな、ライオネル。よく知られているのは、サウスケンジントン、聖グレゴリー教会の評判のよい立派な教区牧師としてであります。さあ、それを封筒に入れて、『モーニング・ポスト』の編集者宛てにするんだ。

グウェンドリン登場

グウェンドリン　ウィニーが二分で準備ができることを伝えてほしいそうです。。

スプラット師　あなたは今さっきわたしをひやかしていましたね、トーマス。お知らせするのを許していただければ、わたしがミス・グウェンドリン・デュラントに結婚を申し込んだら、光栄にも彼女は受け入れてくれました。

終わり